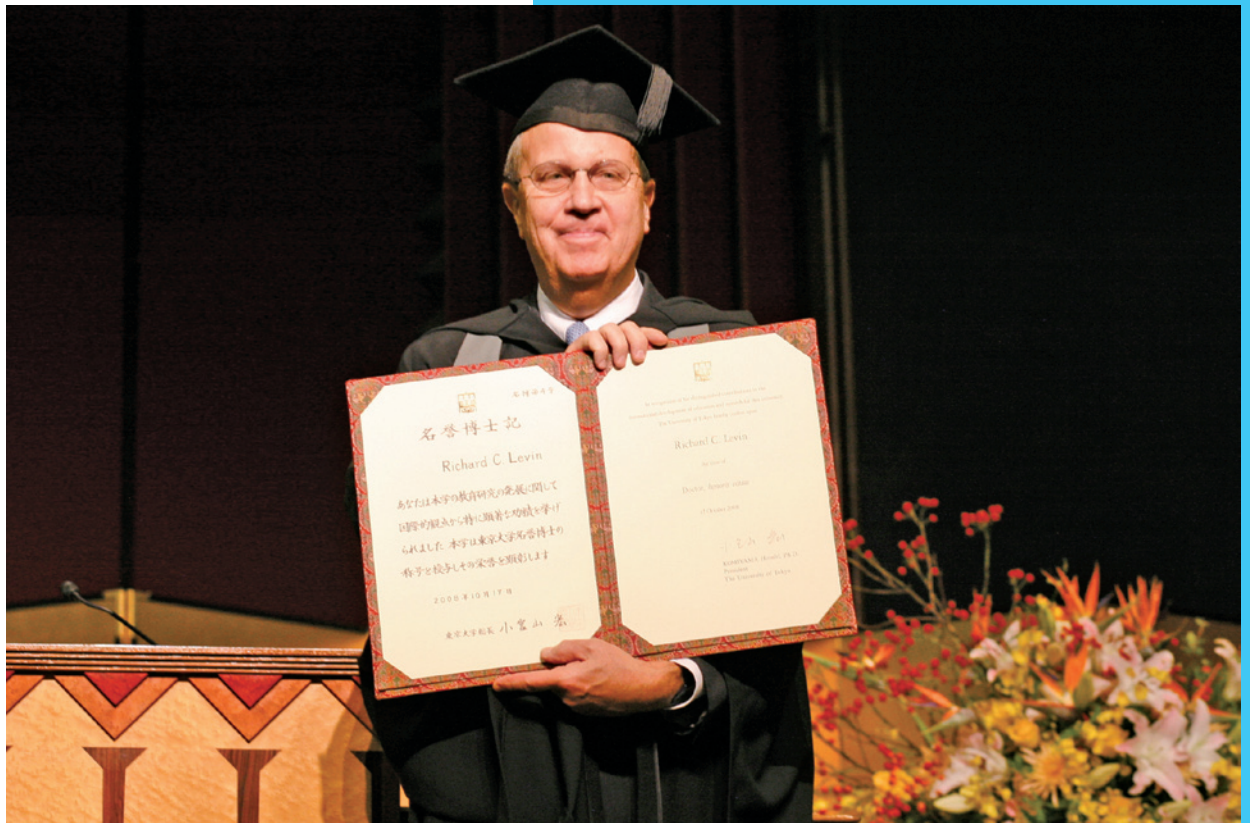


学内広報

for communication across the UT



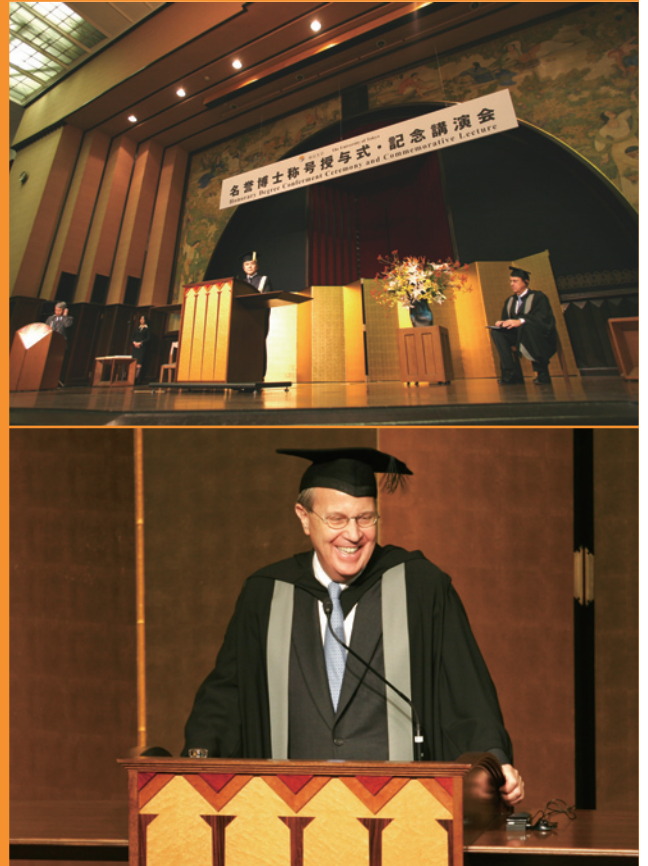
特集：リチャード C.レビン イェール大学学長に
名誉博士称号を授与
平成20年度第1回学生表彰「東京大学総長賞」
授与式開催

リチャードC.レビン イェール大学学長に 名誉博士称号を授与

10月17日（金）、リチャード C. レビン イェール大学学長に小宮山宏総長から名誉博士称号（本学では4人目）が授与され、引き続いてレビン学長による記念講演が催された。会場となった安田講堂には学内外から多数の参加者があった。

レビン氏の功績と授与の経緯

イェール大学の国際化を強力に推進するとともに、世界の主要な大学の学長間できわめて強いリーダーシップを発揮しているレビン学長は、本学初の米国における全学拠点である「東大-イェール・イニシアティブ」の創設に尽力し、同拠点は、米国における日本研究の発展に大きな役割を果たし、本学の国際化に多大な貢献をもたらしている。さらに本学が加盟している国際研究型大学連合（IARU）の枠組みの中で、大学間の共同研究、学生サマープログラムの開始などに尽力し、その結果、多くの教員、学生の交流が活発化し、本学と世界トップレベルの大学との国際学術交流が発展した。このような功績を称え、東京大学はレビン学長に名誉博士称号を授与することとなった。



レビン氏 講演内容

名誉博士記及び記念品の授与に続き、レビン学長より「The University in Service to Society」と題した記念講演が行われた。講演の中でレビン学長は、経済成長の原動力としての大学研究、イノベーションとリーダーシップを目指す教育、地域社会の市民としての大学をキーワードとし、社会に奉仕する大学のあり方について語り、来場者は熱心に聴講した。記念講演会に続いて来場者との質疑応答が行われ、レビン学長は質問に丁寧に対応した。



本学の歴代名誉博士	アマルティア・セン博士	(2002年2月)
	フィリップ・ウォレン・アンダーソン博士	(2002年12月)
	コフィ A. アナン国際連合事務総長	(2006年5月)



リチャード C. レビン氏プロフィール

氏名 リチャード C. レビン
(Richard C. Levin)

生年月日 1947年4月7日 (61歳)

国籍 米国

現職 イェール大学学長
同経済・経営学部
フレデリック・ウィリアム・バインネック教授

学歴
1968年 スタンフォード大学学士号 (歴史学)
1971年 オックスフォード大学文学士号 (政治学、哲学)
1974年 イェール大学博士号 (経済学)

職歴

1974年-1979年	イェール大学経済・経営学部助手
1979年-1982年	イェール大学経済・経営学部准教授
1980年-1982年	イェール大学経営学大学院准教授
1982年-	イェール大学経済・経営学部教授
1984年-1986年	イェール大学経済学大学院研究科長
1985年-1992年	全米経済研究所リサーチ・アソシエイト
1987年-1992年	イェール大学経済・経営学部長
1992年-現在	イェール大学経済・経営学部 フレデリック・ウィリアム・ バインネック教授
1992年-1993年	イェール大学大学院長
1993年-現在	イェール大学学長



功績書

リチャード C. レビン氏は1982年にイェール大学経済・経営学部教授となり、1992年には同学部フレデリック・ウィリアム・バインネック教授に就任、1987～92年は同学部長を務め、1992～93年に大学院の院長となった後、1993年に学長に就任し現在に至っている。

経済学者としてのレビン氏の専門は、特許制度、反トラスト法、米国製造業の競争力など、産業組織と技術革新についての経済学である。数多くの優れた実証研究を経済学の一流ジャーナルに掲載しており、近年における実証産業組織論 (Empirical Industrial Organization) のルネッサンスをリードしてきた。企業の知的生産活動を明らかにしたレビン氏の実証的な研究は、世界のイノベーション研究の潮流に大きな変革をもたらしたとともに、日本の産業政策についても優れた実証分析を行っている。さらに、National Academy of Science、National Research Council、U.S. Bureau of the Census等のメンバーとしても重要な役割を果たしてきた。

学長となってからレビン氏は、グローバリゼーション研究センターの設立、世界の将来のリーダーを養成するイェール世界フェロープログラムの創設、学生全員が在学中に勉学、研究、インターンシップなどで最低一度は外国に滞在するという教育方針などを通じてイェール大学の国際化を強力に推進した。レビン氏はまた、2005年にサステナビリティオフィスを設立し、温室効果ガスの削減目標とそれに到る戦略を示すなど、持続可能社会の実現に向けて高等教育の果たすべき役割を明確にした。また、高度医療センターの開設や、産学連携を通じたニューヘイブーン市との各種の協調的発展プログラムを実施している。このようなレビン氏のリーダーシップによる活動は、大学教育および大学と社会のあるべき関係を示す先導的な事例である。またレビン氏は、世界経済会議におけるグローバル・ユニバーシティ・リーダーズ・フォーラム (GULF) の議長を務めている。これらの活動に加えて、イェール大学でレビン氏とともに大学を指導してきたスタッフの中から世界の有力大学の学長が輩出したこともあり、レビン氏は世界の主要な大学の学長間で極めて強いリーダーシップを発揮している。

東京大学は2007年9月に、海外に置く全学的教育研究拠点としては最初のものとなる「東大－イェール・イニシアティブ」をイェール大学内に創設したが、レビン氏は、その強力なリーダーシップを発揮し、極めて短期間の内にこれを実現することに多大の貢献があった。「東大－イェール・イニシアティブ」は人文学・社会科学の拠点である。同拠点には、本学から教員、若手研究者が派遣され常駐して教育研究を行っており、著名な研究者を招聘しての各種ワークショップ、シンポジウム等を通じ、国際学術交流が盛んに行われている。同拠点は、米国における日本研究の発展に重要な役割を果たし、さらにそれを通じて東京大学の国際化に大きな貢献をもたらすものと期待されている。

レビン氏はまた、2006年から東京大学も加盟している、世界トップクラスの研究型大学10校からなる国際研究型大学連合 (IARU: International Alliance of Research Universities) の活動においても、最も長い在任期間を有する有力大学の学長として指導的な役割を果たし、加盟大学間の共同研究、教員交流、学生のサマープログラムなどの交流事業の企画と実施に力を注いでいる。IARUの活動により多くの教員及び学生の交流が活発に行われ、東京大学とイェール大学を初めとする世界トップレベルの大学との国際学術交流が発展し、その結果さまざまな場面で東京大学の活動が世界に見えるようになったが、その背景にはレビン氏の東京大学に対する強い支援がある。

以上のようなレビン氏の功績は、本学名誉博士称号授与規則が掲げる「本学の教育研究の発展に関して、国際的観点からその功績が特に顕著であった者」に合致すると認められる。よってここに東京大学総長は、東京大学教育研究評議会の議を経て、イェール大学長リチャード C. レビン氏に対して、東京大学名誉博士の称号を授与するものである。

Richard C. Levin

Doctor, honoris causa

Richard C. Levin became Professor of Economics and Management at Yale University in 1982 and was appointed Frederick William Beinecke Professor of Economics in 1992. He served as Chairman of the Department of Economics from 1987 to 1992 and Dean of the Graduate School from 1992 to 1993. He has been President of Yale University since 1993.

A distinguished economist, Dr. Levin specializes in the economics of industrial organizations and technological innovation, including patent systems, antitrust law, and the competitiveness of American manufacturing industries. He has published many outstanding empirical research papers in top academic journals and has led the renaissance in empirical industrial organization studies in recent years. Dr. Levin's pioneering research on corporate intellectual production has brought major changes to research on innovation around the world. He has also performed outstanding empirical analyses of Japan's industrial policy. Moreover, Dr. Levin has played key roles as a member of the U.S. National Academy of Sciences, National Research Council, and Census Bureau.

Since becoming President of Yale University, Dr. Levin has actively promoted the university's internationalization by launching the Yale Center for the Study of Globalization, setting up the Yale World Fellows Program, which trains future global leaders, and announcing a policy to provide every undergraduate student the opportunity to go abroad for study, research, or internships at least once during his or her college career. Furthermore, Dr. Levin has been a strong advocate for the role that higher education should play in creating a sustainable society. In 2005, he established the Yale Office of Sustainability and endorsed a greenhouse gas reduction target and strategy for the University. He is also implementing various collaborative development programs with the City of New Haven through a partnership between industry and academia, including launching a state-of-the-art medical center. These activities led by Dr. Levin represent a pioneering style of university education and embody the ideal relationship between universities and society. Dr. Levin chairs the Global University Leaders Forum (GULF) at the World Economic Forum. In addition, Dr. Levin has shown very strong leadership among the presidents of the world's major universities, and administrators who have led Yale University alongside Dr. Levin have gone on to become presidents of other leading universities around the world.

In September 2007, the University of Tokyo launched the Todai-Yale Initiative for Japanese Studies and Related Humanities and Social Sciences, our University's first overseas center for university-wide education and research. Dr. Levin demonstrated exceptional leadership in the Initiative and contributed greatly to bringing the project into being in a very short time. Under the Todai-Yale Initiative, University of Tokyo faculty members and young researchers are sent to Yale and stationed there to engage in education and research activities. The Initiative is also active in international academic exchange, sponsoring workshops and symposiums featuring eminent scholars. The Todai-Yale Initiative is expected to play an important role in the advancement of Japanese Studies in the United States and thereby to make a major contribution to the internationalization of the University of Tokyo.

As the longest-serving president of a top university, Dr. Levin plays a leadership role in the activities of the International Alliance of Research Universities (IARU), an alliance of ten of the world's finest research universities, which the University of Tokyo joined in 2006. Dr. Levin has focused on the planning and implementation of exchange programs among IARU member universities, including joint research, faculty exchanges, and student summer programs. Thanks to the IARU, there are now many dynamic exchange programs for faculty and students, and the University of Tokyo's international academic exchanges with Yale University and the world's other top universities have been enhanced. As a result, the activities of our University have come to be noted throughout the world in various settings. Behind this is Dr. Levin's strong support of the University of Tokyo.

The above accomplishments of Dr. Richard Levin are deemed to fulfill the requirement for an honorary doctorate as stated in the University of Tokyo Regulations for the Conferring of Honorary Doctorates, namely, the requirement of having particularly distinguished accomplishments, from an international perspective, that advance the University of Tokyo's education and research. Therefore, with the approval of the University of Tokyo Education and Research Council, the President of the University of Tokyo hereby confers upon Dr. Richard C. Levin, President of Yale University, an honorary doctorate.

特集 平成20年度第1回学生表彰「東京大学総長賞」授与式開催

平成20年度第1回総長賞(秋)は、学業以外の課外活動等を対象として募集を行い、合計21件の推薦をいただき、学生表彰選考委員会の厳正なる審議の結果、個人2件、団体2件の計4件が受賞者として選出されるとともに授与式が開催されました！

日時

10月21日(火)
17:00~18:00

大学院数理科学研究科
大講義室
(駒場 I キャンパス)



受賞者全員との記念写真



授与を受ける藤原さん、平松さん

授与を受ける高橋さん



授与式では、総長から表彰状と記念品が受賞者に贈呈された後、各受賞者から今回の受賞内容に関するプレゼンテーションが行われ、それぞれの活動に対する思いや関係者への感謝の意などが述べられました。

なお、本授与式には、本学学生、教職員、本学OB・OG等、約150名が参加し、賑わいのある祝福と交流の場となりました。

式次第

奏楽 東京大学音楽部管弦楽団
(平成14年度第2回受賞団体) 演奏

《授与式》

- 選考結果報告
- 表彰状及び記念品の授与
- 総長挨拶
- 受賞者プレゼンテーション
- 記念撮影

《懇談会》

懇談
「ただ一つ」斉唱 運動会応援部
(平成14年第1回受賞団体)

鉄門山岳部のプレゼンテーション



教養学部化学部のプレゼンテーション

更なるご活躍を
期待します！



■本件問合せ先: 本部学生支援グループ 宮内(内線: 22514)

受賞者紹介

【個人】2件



藤原清香(医学系研究科博士課程3年)・ 平松竜司(農学生命科学研究科博士課程4年)

藤原氏は整形外科医師として、その専門知識を生かして障害者スポーツに貢献し、日本障害者スポーツ協会医学委員会委員も務めてきた。また、平松氏は障害者自転車日本代表コーチとして選手指導にあたり、世界選手権における複数の金メダルの獲得など、日本代表の活躍に貢献してきた。

両名はこれらの実績から、北京パラリンピック日本選手団を統括する本部役員として派遣され、藤原氏は医療班として医療面および選手の体調管理に従事、平松氏は競技担当総務として選手の直接的な競技支援にあたった。

障害者スポーツは健常者以上に多くのサポートを必要としていることから両名のサポートは競技成績に直結するものであり、パラリンピック日本代表選手の活躍における両名の貢献は賞賛すべきものとして高く評価された。



高橋 淳(農学部4年)

高橋氏は、将棋の個人戦において、第60回学生名人戦で準優勝、第10回学生将棋選手権で優勝した。学生将棋の頂点である学生将棋選手権優勝は2度目であるが、2度の優勝は史上初の快挙である。

団体戦では、本学将棋部を主将として率いた第3回毎日杯、第47回全日本学生団体対抗戦に関東代表として出場し、優勝。その結果、第20回リコー杯アマチュア将棋団体日本選手権に学生代表として出場し、優勝を飾り、団体戦三冠を達成した。また、将棋の普及、発展に関する社会貢献活動も積極的に行う等、その優秀な成績と活躍による功績が高く評価された。

【団体】2件



東京大学教養学部化学部

東京大学教養学部化学部は1949年に発足し、教養学部の1、2年生が中心となって、部員相互で教育指導しながら、自ら設定した化学的課題の追求、実験技術の研鑽を行い、駒場祭でそれらの成果を毎年発表している。上記以外の特筆すべき同部の活動として、大学が秋季休業中の9月頃に、主に北海道や東北地方の中学校を訪ね、理科の正規授業

時間に化学の実験を実演しながら、化学のおもしろさ、楽しさ、不思議さを中学生に伝える「化学実験教室」を1959年以来、50年近くの長期にわたってほぼ毎年行っている。これは、化学部員にとっては自己鍛錬の場となっているとともに、「理科離れ」が叫ばれる近年では中学生の化学への興味を喚起する役割も担っている。このような社会貢献の実績が高く評価された。



東京大学医学部鉄門山岳部

東京大学医学部鉄門山岳部は、医学部学生による運動クラブである。同部は登山を通して心身の育成や自然愛護精神の涵養に努める一方、穂高岳涸沢で夏季診療所を開設し、より安全な登山を提供する活動を1960年から50年近くに亘り行ってきた。診療所は「東大涸沢診療所」の名称で夏季のみ開設し、その間は主に山岳部OBの医師が交代で診療に当たる。診療は、骨折・外傷・高山病などの登山に特有の疾病のほか、

下痢風邪を含む多様な疾病を対象とし、開設期間に約100名の患者が訪れる。学生は、医師の診療補助として医療の現場に触れるだけでなく、医師の駐在日の調整、診療に必要な医薬品や他の診療関連用品の調達・荷揚げ、建物提供者の涸沢ヒュッテや山岳パトロール隊での勤労奉仕等を行い、診療所運営に携わってきた。これらの活動と貢献は賞賛すべきものとして高く評価された。

NEWS

一般ニュース



本部研究推進グループ

「東京大学稷門賞」授賞式が
行われる

一般

平成 20 年度「東京大学稷門賞」の受賞者が、姜裕文様、内藤進様、根本信男様、堀場雅夫様、株式会社エンゼルハウス代表取締役社長中島篤様、セイホク株式会社代表取締役社長井上篤博様の 5 区分 6 件に決定し、授賞式が 9 月 30 日（火）17 時から情報学環・福武ホールにおいて挙行された。本表彰は、私財の寄附、ボランティア活動及び援助等により、本学の活動の発展に大きく貢献した個人、法人又は団体（現に在籍する本学の教職員及び学生は原則として対象外）に対し授与するもので、平成 14 年度より毎年度行うこととしている。授賞式においては、選考結果の報告、各受賞代表者への表彰状及び記念品の贈呈があり、その後、小宮山宏総長の挨拶、受賞者からの挨拶が行われた。また、授賞式に引き続き、レセプションが行われ、受賞者及び受賞関係者と本学関係者との懇談が和やかな雰囲気の中で行われた。

受賞者の授賞理由は以下のとおりである。

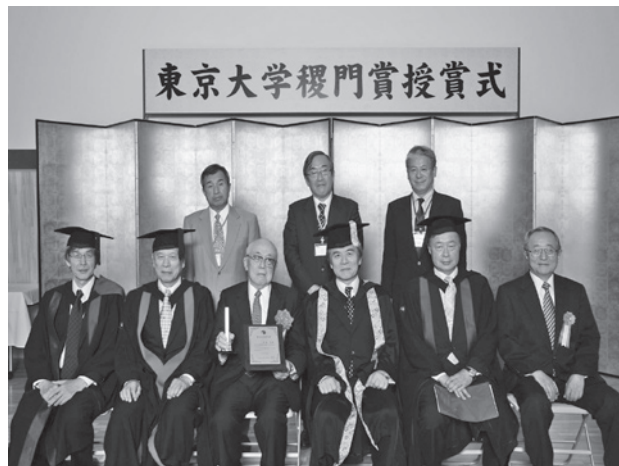
◎ 受賞者

1 姜裕文様

受賞理由：「姜裕文奨学基金」は、寄附者個人の名前を冠した最初の奨学基金であって、先駆者的意義がある。私費留学生に対する支援は、平成 19 年度・20 年度にそれぞれ 2 名が支援対象に採用され、また国際交流活動の支援も平成 19 年度・20 年度にそれぞれ 5 名が支援対象に採用されて、共に本学の国際化に大きく貢献している。また、姜裕文氏が研究奨励費支給対象の学生たちと個人的に面談して激励していることも高く評価された。（姜裕文様授賞式ご欠席）

2 内藤進様

受賞理由：80 年の歳月を経て老朽化した旧山中寮に代わる「東京大学山中寮セミナーハウス」建設のため、5 億円の寄附をいただいたものである。保健体育施設としての山中寮の重要性は既に歴史的に証明されているが、国際会議をも行なうことのできるセミナーハウス機能が付加されることで、東京大学の教育研究においても大きく貢献することは確実である。



内藤進様及び推薦部局関係者、総長との記念撮影

3 根本信男様

受賞理由：東京大学アントレプレナープラザは 2007 年 5 月末に完成し、同年 6 月から活動を開始している。同プラザは、他大学の類似施設と比べて格段に大きい規模と、バイオサイエンスにも対応できる質の高い設備を持ち、本学の学術を社会還元するための中核拠点の役割を果たしつつある。



根本信男様及び推薦部局関係者、総長との記念撮影

4 堀場雅夫様

受賞理由：これまで東京大学基金が行ってきた国際シンポジウム等に対する支援と比べると、「堀場国際会議」の支援金額ははるかに大きく、運営も機動的であって、利便性が高い。「堀場国際会議」の支援によって、平成 19 年度には 3 件の国際会議が開催され、また平成 20 年度には 2 件の国際会議の開催が予定されており、本学の学術研究の高度化と国際化に大きく貢献している。



堀場雅夫様及び推薦部局関係者、総長との記念撮影

5 株式会社エンゼルハウス代表取締役社長 中島篤様
 セイホク株式会社代表取締役社長 井上篤博様
 受賞理由：弥生講堂アネックスは木質材料による大空間建築を目指すもので、農学生命科学研究科における木質材料学研究的発展に大いに貢献していること、平成20年度日本建築学会賞を狙うほどの斬新な設計であること、年間300日に近い高い稼働率を誇る弥生講堂のアネックスとして広く学内外の行事に使われることが予想され公共性が高いこと等が高く評価された。



株式会社エンゼルハウス代表取締役社長中島篤様及び推薦部局関係者、総長との記念撮影



セイホク株式会社代表取締役社長井上篤博様及び推薦部局関係者、総長との記念撮影

本部学生支援グループ
 東京大学山中寮内藤セミナーハウス
 新営その他工事安全祈願祭（起工式）
 が執り行われる

10月1日（水）に山梨県山中湖村において、来年からリニューアルオープン予定の「東京大学山中寮内藤セミナーハウス」新営その他工事安全祈願祭（起工式）が執り行われた。

当日は、寄附者であるリンナイ(株)の内藤会長をはじめ、山中湖村から長田副村長（村長代理）、本学から、岡村理事・副学長、池上顧問、木下運動会常務理事、石橋富士演習林長等、関係者を含め約30名が出席し、工事の無事を祈願した。



内藤会長による鋤入れ



岡村理事・副学長による鋤入れ

海洋アライアンス
 第1回イブニングセミナー開催

10月2日（木）、本郷キャンパス工学部3号館において、海洋アライアンス・第1回イブニングセミナーが開催された。同セミナーは、海洋アライアンスメンバーの

相互理解を図ると同時に親睦を深めることを目的に、各自の研究を紹介しあうものである。今回は、農学生命科学研究科から八木信行特任准教授、公共政策大学院から長谷知治特任准教授による、以下の講演があった。

- ・「グローバル経済における生物資源の利用と保全」
八木信行特任准教授
- ・「船舶に起因する油濁損害に関する保障制度」
長谷知治特任准教授

八木特任准教授はモロッコのタコ資源を例にとり、価格などの市場データを利用することで、資源枯渇の状況を大まかに把握できることを示した。他にもマグロのIUU漁業（無法・無許可・無報告漁業）の問題や、生物資源管理の問題に関するわかりやすい解説があった。

また長谷特任准教授は、船舶による損害に対する賠償制度の特徴、船舶所有者による賠償、国際油濁補償基金の制度などについて実例を挙げて紹介した。特にわが国で起きたナホトカ事件や日立港沖座礁事件については、会場の参加者たちも身を乗り出すように見入っていた。

当日会場には各部局から多くの教授、学生が集まり、講演後のディスカッションでは活発に意見が交わされていた。

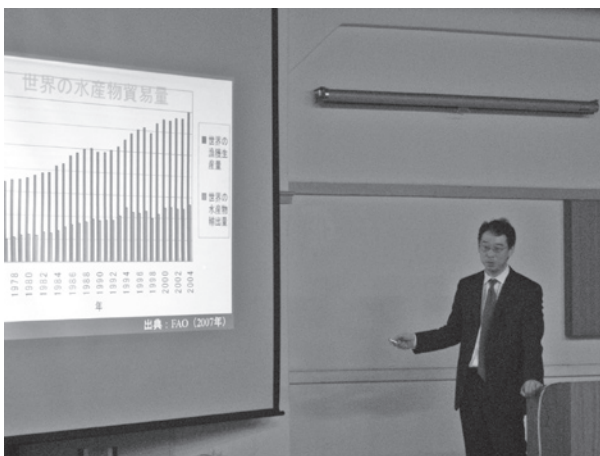
問題解決型の海のシンクタンクを目指す海洋アライアンスにとって、部局を越えた協力・連携は大変意義深い。これからも2ヶ月に1回のペースで、開催予定である。多くの参加を期待したい。

なお第2回イブニングセミナーは法学政治学研究科・中谷和弘教授と海洋研究所・窪川かおる教授を講師に迎え、12月4日（木）18:00から、工学部3号館306会議室にて開催されます。

多くのご参加、お待ちしております。

海洋アライアンスホームページ：

<http://www.ou.tokyo.ac.jp>



八木特任准教授による講演



長谷特任准教授による講演



活発な質疑応答

本部キャリアサポートグループ

**博士課程学生・ポストドクター対象
企業説明会開催**

一般

10月14日（火）17時から浅野キャンパス武田先端知ビルを会場として、キャリアサポート室主催の博士課程学生・ポストドクター対象企業説明会が開催された。

2005年に開設されて以来キャリアサポート室では、学部学生、大学院学生を主たる対象として卒業生との交流の場の提供、業界・企業について研究する場の提供、キャリアアドバイザーによるキャリア相談などのサービスを行ってきたが、昨年度、これらのうち業界・企業研究とキャリア相談とをポストドクターにも本格的に門戸を開いていくための第一歩として、この説明会を開催し、今回が第2回目である。

武田先端知ビル5階の武田ホールに出展13社の個別テーブルを設置、参加者はそれぞれのテーブルで企業の人事担当者や技術部門担当者らと懇談する形式で、学生、ポストドクターの140人以上が来場、予定の2時間を過ぎても懇談の続くテーブルがいくつか見られ、盛り上がりを見せた説明会であった。

学生相談ネットワーク本部

第2回教職員のための「学生のメンタルケア」講習会を駒場キャンパスで開催



一般

10月24日（金）に学生相談ネットワーク本部主催、平成20年度第2回教職員のための「学生のメンタルケア」講習会を駒場キャンパス数理科学研究棟大講義室にて開催した。6月に本郷キャンパスにて開催した「学生のメンタルケア」講習会の第2弾で、今回は学生相談ネットワーク本部精神保健支援室の大島紀人助教、保健センター精神科井野英江臨床心理士の講義「大学生によく見られる心の問題とそのケアのために」及び駒場学生相談所丹野義彦教授、石垣琢磨准教授、松島公望助教による講義・演習（グループディスカッション）「東大の学部生・院生の特色とその対応について～駒場の学部生・院生を中心として～」が行われた。

アンケートの結果から、個々の講義・演習に関して、「大変良かった」「良かった」との回答が80%以上を占め、90%以上の参加者から「今後の業務に活かせる」との回答を得た。講習会に参加したきっかけについては、80%以上の参加者が「本人の希望」または「プログラムに興味があって参加した」との回答で関心の高さがうかがえた。学生のメンタルヘルスの問題を学べる場が少ないため、今回の講習会を受講したとの意見が多く、具体的な対応策についての講義や演習が習得できたとの感想も多く寄せられた。

参加者は10の部局から35名（うち教員15名、職員20名）にのぼった。

【学生相談ネットワーク本部・今後の予定】

「三浦雄一郎氏講演会 ～75歳エベレストへの挑戦～」

12月8日（月）本郷キャンパス安田講堂にて開催

<http://dcs.adm.u-tokyo.ac.jp/event-sp/index.html>



講義風景



演習（グループディスカッション）風景

本部キャリアサポートグループ

知の創造的摩擦プロジェクト第7回交流会開催



一般

10月25日（土）、駒場Iキャンパス コミュニケーション・プラザ南館において、知の創造的摩擦プロジェクト第7回交流会「目標となる先輩はいますか？」が開催された。

卒業生との交流を通して、学生のキャリア形成支援を目指すこの大学主催のイベントも、2005年10月の本郷キャンパスでの第1回以来、毎年、本郷キャンパス、駒場Iキャンパスでの各開催を経てこれで第7回目。今回は約100名の卒業生と約250名の学生が参加した。

開会にあたり浅島誠理事・副学長（キャリアサポート担当）は、学生の指導、育成にあたって大学教職員にとどまらず、卒業生がこれに参画する道が開けることの意味に言及して、卒業生が多数参集されたことの意味を称え、各方面において輝きを放つ卒業生は本学の財産でもあるとして謝意を表し、学生には、卒業生が多数集まってくれたこの交流会が「あのときあの人に会えてよかった」と思える場となることを期待すると述べて励まされた。

第一部グループディスカッション、第二部懇親会の二部構成で13時から19時まで、なごやかに、けれども熱のこもった会話の輪が広がった。

毎回「東京大学三四郎会」と本学学生サークル「東大ドリームネット」の多大なる支援、協力のもとに行われるこの交流会が、学生と卒業生がともに主体的に参画するいわば「東大コミュニティ」ともいべき交流の仕組みの熟成につながることを期待されているところである。事実、2005年10月の第1回交流会から3年を経て、三四郎会のネットワークは約350名に拡大、若手の卒業生が大学との関わりを持ち続けるための仕組みとしても有意な機能を発揮しつつある。



開会挨拶の浅島理事・副学長



会話の輪

環境安全本部

「第1回 関東甲信越地区大学安全衛生研究会」開催される

一般

10月27日(月)13時30分から、「第1回 関東甲信越地区大学安全衛生研究会」が、本学山上会館(大会議室)にて開催され、関東甲信越地区の国立大学(21大学)が参加し、盛況のうち無事終了した。

大学における安全衛生管理の確立を目指して、国立七大学の安全衛生担当者間で、それぞれの大学が抱える安全衛生に関する課題への対応を目的とする「七大学安全衛生管理担当者連絡協議会」が開催されているが、七大学はそれぞれの地区の大学と連携して、問題点の集約にあたることとした。この研究会は、関東甲信越地区の大学が抱える諸問題について、意見・情報交換、集約を目的として開催されたものである。

今般の研究会では、岡村定矩理事・副学長(環境安全担当)の挨拶を皮切りに、中西友子環境安全本部長から「東京大学の安全衛生活動について」と題した報告が行われた後、「大学の安全衛生活動に求められるものについて」と題した小山富士雄環境安全副本部長の講演、「東京大学における化学物質管理について」と題した戸野倉

賢一主幹の講演が行われた。次いで休憩時間をはさみ、他の関東甲信越地区の大学から「東京工業大学における安全衛生活動について」と題した長谷川紀子助教(東京工業大学総合安全管理センター)の講演、「信州大学における健康管理について」と題した塚原照臣産業医・講師(信州大学健康安全センター)の講演、「大学における安全衛生活動と課題」と題した関山節子技術専門職員(群馬大学工学部技術部)の講演が行われた。これら安全衛生管理を取り上げた講演に参加者も熱心に聞き入り、活発な意見・情報交換が行われた。最後に中西本部長の閉会挨拶があり、本研究会を今後も継続的に開催することを確認して終了した。



岡村定矩理事・副学長の挨拶に聞き入る参加者



法人化後の「大学に合わない法規」に関しても、活発な意見・情報交換が行われた。写真は塚原照臣産業医・講師(信州大学健康安全センター)

本部総務グループ

名誉教授懇談会の開催

一般

10月28日(火)18時から山上会館において名誉教授懇談会を2年ぶりに開催した。

名誉教授の方々144人が御出席され、学内からは小宮山宏総長をはじめ理事・副学長、各部局長等の関係者多数が出席した。

懇談会は、小宮山総長の挨拶の後、小柴昌俊特別名誉教授の発声で乾杯があり懇談が開始された。途中、平成

19年度・20年度の名誉教授称号授与者を代表して大学院総合文化研究科・教養学部の岩田一政名誉教授の挨拶があり、終始なごやかな雰囲気が続けられ、岡村定矩理事・副学長の閉会挨拶をもって散会した。



写真上：挨拶をする小宮山総長（左）、乾杯の挨拶をする小柴特別栄誉教授（右）、写真下：名誉教授称号授与者の代表挨拶をする岩田名誉教授（左）、なごやかな懇談の様子（右）

部局 ニュース

社会科学研究所

部局
グローバルCOEプログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」連携拠点がスタート

今年度、東北大学を本拠点として採択されたグローバルCOEプログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」(Gender Equality and Multicultural Conviviality in the Age of Globalization、拠点リーダー辻村みよ子教授)において、本学社会科学研究所が連携拠点（連携拠点リーダー大沢真理教授）としてプログラムの一端を担うことになった。

性別、年齢、障害の有無、国籍などにかかわらず、誰もが人格と個性を尊重され、フルに参加できる社会を、いかにして実現することができるか——こうした課題を、本プログラムでは多角的に追求していく。また、「グローバル時代のジェンダー平等と多文化共生」に関する世界的な教育研究ネットワークを確立し、グローバルな課題に挑戦する高度な専門家を養成して、研究成果を社会に還元することを目的にしている。具体的には、conviviality studies、aging social studies、gender studies という3つの領域を有機的に結合しながら、新融合領域研究を創出していくこと、国際的な連携も視野

に入れたクロスナショナル・ドクトラル・コースを設計・実施すること、などを目指している。

7月の採択通知を受けて、早くも8月7日（木）には、拠点リーダー、連携拠点リーダーらによる課題提起を中心として、キックオフセミナーを開催した。今後、セミナーや国際シンポジウム、ワークショップなどの開催を予定している。

10月には「東京大学社会科学研究所 GCOE プログラム連携拠点」オフィスを学外（赤門より徒歩1分）に開設した。同オフィスにはGCOEフェローが常駐し、打ち合わせや研究会のために利用している。今後は、プログラムのニューズレターや研究叢書の出版、ホームページを活用した社会的発信など、GCOEプログラムの研究成果を社会に還元する拠点としての機能も果たしていく予定である。



キックオフセミナー風景



連携拠点オフィスでの研究会風景

東京大学アルスエレクトロニカ 2008 キャンパス展実行委員会は、9月4日（木）から9日（火）にかけておこなわれた世界最大級のテクノロジーとメディアアートの祭典「アルスエレクトロニカ 2008」において、キャンパス展「Ars Electronica Campus 2008: Hybrid Ego - The University of Tokyo」を開催した。



会場となったリンツ芸術工科大学

アルスエレクトロニカは、1979年からオーストリアのリンツで開催されている、世界中から10万人以上が訪れる芸術・先端技術・文化の祭典である。毎年、アートとテクノロジーと現代社会に関するテーマが掲げられ、最先端のテクノロジーを用いた作品の展示、電子音楽のパフォーマンス、アーティストや批評家らによるカンファレンス、キャンパス展など、多くのイベントが開催される。

その中でもキャンパス展は、アートとテクノロジーを結びつけるメディアアート教育に取り組む学校が招待され、その成果を発表する展示である。例年、美術学校など芸術を専門とした教育機関が参加するイベントだが、CREST「デジタルパブリックアートを創出する技術」プロジェクト等この分野における本学のユニークで先導的な取り組みが評価され、総合大学として初めて本学が展示をおこなうこととなった。



展示作品「inter-glow」



展示作品「log-log 2008」

展示はリンツ芸術工科大学でおこなわれ、全24点の作品が展示された。期間中約5000人の観客が来場し、好評を博した。展示に併せてリンツ芸術工科大、チューリッヒ美術大と本学学生らによるカンファレンスやワークショップ等のイベントがおこなわれ、これらも盛況であった。



多くの来場者が訪れ展示は注目を集めた

日本の食料自給率や食の安全の問題が話題となっている折り、10月7日（火）・11日（土）に、教養学部附属教養教育開発機構主催で「食」をテーマにしたシンポジウムが開催された。

7日に行われたシンポジウムは「駒場で『食』を考える」と題して主に前期課程の学生を対象とし、教養学部がキリンホールディングス（株）とともに展開する「食を考える——KIRIN・東京大学パートナーシッププログラム」のキックオフとしてのイベントであった。本学の仏文科を卒業され、文筆業と平行して農場・ワイナリー・レストランを運営されている玉村豊男氏の基調講演の後、玉

村氏に加えて教養学部の文系・理系の教員と、本学の卒業生であるキリン食生活文化研究所所長の太田恵理子氏によるパネルディスカッションが活発に行われた。参加者へのアンケートでは、今後同パートナーシッププログラムのもとで開催されるワークショップシリーズへの参加を希望するものが多く、「食」を通じて学生にさまざまな問題意識を持ってもらうというシンポジウムの目的が達成された。

11日のシンポジウムは「大学教育に『食』を摂取する：初年次活動プログラムの新しい可能性」と題し、初年次教育に関心を持つ学内外の教職員を対象として行われた。ハーバード大学でFood Literacy Projectに直接携わっている教職員2名を迎え、また駒場キャンパス内のレストラン、ルヴェソンヴェール駒場のオーナーシェフである伊藤文彰氏にもパネリストとして登壇していただいた。本学で「食」を教育プログラムに採り入れる試みがあることは全国の大学関係者の関心を大いに引いたようで、遠方の大学からも多数の参加があった。また質疑応答も非常に活発に行われ、関心の高さを窺わせた。



「駒場で『食』を考える」玉村豊男氏の基調講演



「大学教育に『食』を摂取する」パネルディスカッションの様子

「卓越した若手研究者の自立促進プログラム」医科学研究所、分子細胞生物学研究所、物性研究所、地震研究所
 部局 「卓越した若手研究者の自立促進プログラム」シンポジウム開催

文部科学省科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進プログラム」に採択された「卓越した若手研究者の自立促進プログラム」に関するシンポジウムを10月8日（水）に弥生講堂において開催した。

文部科学省から泉紳一郎科学技術・学術政策局長を迎えて行われたシンポジウムでは、平尾公彦副学長、泉局長の挨拶後、宮島篤分子細胞生物学研究所長がプログラムの概要を説明。続いて、プログラム採用教員13名の紹介後、医科学研究所の中江進特任講師が「アレルギーの解明にむけて」、分子細胞生物学研究所の北川浩史特任講師が「核内受容体による転写制御と臨床医学の接点」、地震研究所の田中宏幸特任助教が「宇宙線を用いた地球内部のイメージング」、物性研究所の大串研也特任講師が「ポストペロブスカイトの物性科学」をテーマにそれぞれ研究発表を行った。

また、各研究所長による若手研究者の自立に向けた取り組みに関する紹介後には、総合討論を実施。会場参加者から各研究所長へ若手研究者自立の方策、今後の方向性について多数の意見や質問があり、予定時間を超えるほど活発な議論が展開された。



挨拶する平尾副学長



若手研究者の紹介



総合討論



御遺族に対して感謝の言葉を述べる山下病院長

医科学研究所

「慰霊祭」行われる

部局

医科学研究所では、同附属病院で亡くなられ、病理解剖させていただいた方々の御霊をお慰めるために、10月9日（木）13時30分から医科学研究所慰霊祭を挙行了。式は、参列者全員による黙禱に始まり、献体者御尊名の奉読の後、清木元治所長が「御霊に捧げることば」を述べた。続いて、御遺族及び医科学研究所教職員が献花を行い、最後に、山下直秀病院長から御遺族に対して感謝のことがあり、14時過ぎに滞りなく終了した。



「御霊に捧げることば」を述べる清木所長

大学院総合文化研究科・教養学部

初年次活動センター竣工記念式典開催される

部局

10月11日（土）13時から駒場Iキャンパス アドミニストレーション棟ウッドデッキ横において、初年次活動センター竣工記念式典が行われ、本学教職員を中心に約50名が出席した。小島憲道教養学部長の挨拶、小宮山宏総長及びテッド・メイヤー氏（ハーバード大学ダイニングサービス取締役）の祝辞の後、テープカットが執り行われ、その後、初年次活動センター室内の見学が行われた。

初年次教育とは、主として新入生を対象として、学生の社会的・学問的経験をより充実させるべく展開される総合的な教育プログラムであり、近年では世界各国の大学教育でも重要な位置付けがなされている。教養学部はこれまでも、文部科学省海外先進教育実践支援プログラムの援助を受けてハーバード大学やペンシルバニア州立大学へ教職員を教養教育の視察のために派遣するなど研究を重ねている。具体的な内容は大学によって千差万別で、ガイダンス、スタディ・スキル、自校教育、学習スタイルの転換を図る初年次少人数教育、キャリアデザイン、成績優秀者専用コースなど多岐に及んでいる。

初年次活動センターは、駒場Iキャンパスの中でも、教室や研究室の集まる区域と、課外活動施設が集まる区域のちょうど境界に位置しており、学生が学習コミュニティを作るための居場所となるべく設計・建設された。教養学部は従前より教養教育の改革を積み重ねてきたが、同センターは、正課外でも（特に前期課程の）学生に対する様々なサポートを展開する拠点となることが期待されている。



テープカットの様子



初年次活動センターの外観

生産技術研究所

「第4回駒場キャンパス技術発表会」
開催される

部局

10月17日（金）、生産技術研究所 総合研究実験棟・大会議室において技術発表会が開催され、多くの聴講者が熱心に聴き、発表について質疑や討論も盛んに行われた。

この技術発表会は学会と違い専門知識を持ち合わせない聴講者が多く、なかなか表現することが難しい内容を聴講者に理解しやすい話し方で話すことを心がけており、実に心遣いのある発表会であった。

恒例となった招待講演では生産技術研究所のコンクリート工学研究室の星野富夫技術専門員が「暴露実験（建設材料）における技術職員の役割と成果」について講演し、職歴40年を越えるなかで関わり合ってきた暴露実験について技術職員の視点で報告された。

また特別講演ではTBIリハビリテーション研究所所長・藤井正子先生による「神経リハビリテーションのパラダイムシフトと外傷性脳損傷の回復」という講演で、交通事故・スポーツ事故・労働災害等による外傷性脳損傷の回復訓練として最近の研究と事例をまじえて話され、聴講者は回復訓練テストも体験した。

例年優秀な発表に対して贈られる所長賞は、河内泰三技術専門職員の「四重極電子変更器の試作品を用いた核共鳴励起内部転換電子放射の測定」、高橋岳生技術専門

員の「身近な空気の流れ現象の可視化」が選ばれた。

懇親会は名誉教授・技術職員OBなど外部からの参加者もあり、多くの方が参加された。また藤井陽一東大名誉教授（生研3部）らによるフルート演奏が懇親会に華を添えた。

今年も企画段階から開催に至るまで、多くの技術職員のご協力をいただき、心から感謝を申し上げる。



回復訓練テストを受ける聴講者



野球のボールを交え空気の流れを説明する
高橋岳生技術専門員



懇親会での藤井陽一東大名誉教授らによるフルート演奏

10月18日(土)・19(日)の両日、大学院総合文化研究科・教養学部が主催する会津若松・猪苗代への留学生見学旅行が実施された。参加者は留学生36名(学部生25名、大学院学生11名)と引率の教職員4名の計40名であった。

抜けるような青空の下、朝8時30分に駒場キャンパスをバスで出発し東北道を4時間余り揺られ、最初の見学地である五色沼に到着。五色沼の一つ毘沙門沼の湖面はコバルトブルーに輝き、周囲の山々は見事な紅葉で彩られ、その自然の美しさに驚嘆の声があがった。

次の見学地、会津藩校日新館では会津地方の郷土玩具「赤べこ」の絵付けを体験した。皆、真剣な顔つきで無地の赤べこに思い思いの顔と模様を描くと、出来上がった赤べこの顔はどことなく作成者似で、世界にたった一つの旅の思い出の品となった。その後、同館の方の案内で館内を見学し、全国に300程あった藩校の中でも規模・内容共に高水準であったこと、本学の元総長である山川健次郎先生も同校で学ばれたことなどの説明に、皆、熱心に聞き入っていた。本研究科には日本の歴史や文化を研究分野とする留学生も多く、事前によく調べ、説明者に色々質問する姿もみられた。

夜は松原湖畔のホテルに宿泊し、懇親会では自己紹介や歌を通じて参加者相互の親睦を深め、楽しいひと時を過ごした。

2日目は飯盛山に向かい、「白虎隊士の墓」と国の重要文化財に指定されている「さざえ堂」を見学し、参加者一同、戊辰戦争が起きた明治初期の頃にしばし思いを馳せた。昼食後は「鶴ヶ城」を見学し、バスの窓越しに美しく色付いた山々を眺め、別れを惜しみつつ帰途についた。

学部1年生から博士課程まで、年齢も国籍もさまざまな留学生達が、過去の歴史と美しい風景に浸りながら互いに交流を深めることができ、この2日間は非常に有意義な思い出深いものとなった。



毘沙門沼湖畔にて



「赤べこ」の絵付け体験



会津藩校日新館で説明に耳を傾ける様子

第11回「東京大学分子細胞生物学研究所実験動物慰霊祭」は10月21日(火)11時より、農学生命科学研究科附属動物医療センター奥の動物慰霊碑前において執り行われた。当日は、秋晴れの空の下83名の参列者があり、宮島所長からの挨拶、内藤動物実験委員長から一年間の動物実験概要の報告に続いて、教職員・学生等参列者による焼香がしめやかに行われた。

分生研では、研究所本館地下のSPFマウス実験施設及びウサギ飼育室、本館玄関前の新動物舎、そして生命科学総合研究棟地下の実験動物施設を利用して、多くの教職員・学生等が遺伝子改変マウスの作製及びその解析、神経系や造血系の初代培養細胞の分離、タンパク質の精製、抗体の作製などの目的で実験動物を使用している。その数は過去一年間にマウス約15,000匹、ラット2匹、ウサギ8羽にも上り、これらの動物実験で得られた新しい知見は学会や学術論文に発表され、それぞれの専門分野において高く評価されている。

ここに分生研の研究活動のために尊い命を捧げてくれた動物たちの御霊に感謝と追悼の意を表します。

分生研における動物実験は今後ますます盛んに行われるようになるものと思われませんが、「動物の愛護及び管理に関する法律」（平成17年改正）、「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針」（平成18年）を遵守し、動物実験等に関する基本理念である3R（Replacement、Reduction、Refinement）を尊重して、必要最小限の動物を用いて最大限の研究成果が挙げられるよう、関係する皆様方になお一層の努力をお願いしたいと思います。



焼香する宮島所長（写真右）と内藤動物実験委員長（左）

史料編纂所

アフタヌーンセミナー 2008 の開催



10月22日（水）午後、「政治の舞台、桜田門外から江戸城を巡る」と題してアフタヌーンセミナー2008を開催した。本所教員による幕末の江戸城にまつわる歴史的講話を聞きながら、江戸城内外を2時間ほど踏査する趣旨であった。

一橋徳川邸跡であるKKRホテル東京を講義の場とし、13時から開始した。横山伊徳所長からのあいさつ、参加者15名による自己紹介の後、「將軍の政治と江戸城」と題した山口和夫准教授による近世の江戸城略史に関する講話があった。

講話終了後、14時30分に野外に出た。好天に恵まれ、見学に適した日和であった。KKRホテル東京から井伊家上屋敷跡である憲政記念館をとって桜田門へ移動し、そこで杉本史子准教授から「桜田門外の変」に関する説明をおこなった。



桜田門での説明

桜田門から江戸城跡に入り、皇居前広場をとって三の丸大手門へと移動したが、その間、箱石大准教授により坂下門外の変や江戸開城にまつわる説明があった。大手門から江戸城本丸跡に登城し、小宮木代良准教授から江戸城本丸に関する説明があった。



江戸開城等に関する説明

その後、松の廊下跡、大奥跡、天守台等を巡り、16時30分に再びホテルの会場に戻り、茶菓を交え、「桜田門外の変とそれを巻き巻く世界」（杉本）及び「江戸開城」（箱石）の講話を行った。参加者から数々の質問や鋭い指摘が出された。

本セミナーは、参加者の歴史への熱い向学心と積極性に助けられ、盛会のうちに終了した。



談話風景

10月25日(土)に、経済学研究科棟第一教室にて、第8回東京大学東洋文化研究所公開講座が開催された。本講座は、東洋文化研究所が長年蓄えてきた知的ストックをもとにして、研究所スタッフがわかりやすく解説するアジアを知るための公開講座である。第8回は『アジアの濤』。アジアの歴史を変えてきた、そしてこれからアジアの未来を変えていく、ひとびとの大きなうねりに焦点をあてた内容で、大川助教による「チベット問題報道を読む」、真鍋准教授による「現代韓国の民衆運動——光州事件から盧武鉉政権まで」、長沢教授による「中東問題と日本」の講演が行われ、例年どおり大勢の市民の出席を得、活発な質問・意見が寄せられた。



講演後の質疑応答の様子

平成20年度 学内広報 発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日	配布
1380	学生生活実態調査号		
1381	11月 26日(水)	12月 12日(金)	12月 18日(木)
1382	1月 7日(水)	1月 26日(月)	1月 30日(金)
1383	1月 29日(木)	2月 16日(月)	2月 20日(金)
1384	2月 25日(水)	3月 13日(金)	3月 19日(木)

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html
【東京大学ホームページ】→【右下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム
TEL: 03-3811-3393 内線22031
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



＝ 特集テーマ&執筆部署募集告知＝

特集の記事を 執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。学内への周知を図るためのツールとして特集はとても効果的です。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？

1. 制作方法

① テーマの選定

全学の教職員を読者対象とするテーマを選定することになっています。まずは、本部広報グループまで、お気軽にご相談ください。特集に馴染まないテーマでない限り、対応します。

(締切日の3週間前位までに一度ご相談ください)

② 内容・構成の決定

テーマが決まったら執筆部署と学内広報編集スタッフ(以下、編集スタッフ)が打ち合わせをしてページの内容を決めていきます。見開き2ページをひとつの単位とします。内容が盛りだくさんの場合は4ページ、または6ページで構成することもあります。

③ 原稿の執筆

決定した構成に合わせて執筆部署に原稿を書いていただきます。字数等は編集スタッフが提示します。原稿はWordファイルでご制作下さい。

④ ビジュアル要素の提供

特集に盛り込む写真・図・イラストを執筆部署から提供していただきます。手持ちの写真がない場合は編集スタッフが撮影にうかがいます。

(学外または他部署のホームページ等から写真・図・イラスト等を転用する場合は著作権に十分留意し、必ず先方の許諾を得てからご使用ください)

⑤ デザイン

お書きいただいた原稿、ご提供いただいた写真・図等を素材にして、編集スタッフがページデザインを作ります。もちろん、執筆部署でデザインを作っていただいてもかまいません。

⑥ 校正

デザインしたページイメージをお送りしますので、主に文字校正を行なっていただきます。

⑦ 完成

刷り上がった学内広報は、執筆部署に多めに配布します。

2. 締切日

あらかじめ、こちらから期日を申しますので、ご協力をお願いします。通常の学内広報〆切日の**数日前**を原稿締切日とします。

3. 問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム
TEL: 03-3811-3393 内線22031
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

起業・大学発ベンチャーセミナー開催 ~大学発ベンチャーにおける人材戦略の現状と課題~

大学発ベンチャーに厳しい人材確保の現状 切り札となるものは？

9月18日(木)、第4回「起業・大学発ベンチャーセミナー(拡大版:産学連携本部・東京大学エッジキャピタル共催)」が経済学研究棟大教室で開催されました。テーマは、「大学発ベンチャーにおける人材戦略の現状と課題」。講演者、パネリストからは、起業初期の人材確保は、理念を共有できることを基本に、知り合いを通じた人脈に頼らざるを得ない状況にあること、次の段階として新卒者の採用、海外への事業展開をにらんだ人材確保などが課題であることが提起されました。各務茂夫産学連携本部事業化推進部長からは、同窓会組織などを活用した起業家ネットワークをつくってベンチャー企業との出会いの場をつくる方策も提案され、期待が寄せられました。



高井 正美氏

ベンチャー企業の育成・支援に多方面から関わっている講演者の高井正美氏(株インヴィニオ取締役、MITエンタープライズフォーラム副理事長、株モルフォ社外取締役)からは、限られた時間のなかで組織と人材を育てる能力が求められることから、成功報酬ベースで経営支援する経験豊富な社外取締役の登用が大きな意味を持つとの指摘がなされました。

郷治友孝氏(株東京大学エッジキャピタル代表取締役社長)からは、講演のなかで、ベンチャー企業は、個々の能力を引き出せる経営者のもとで、チーム力を発揮することが重要であり、まずは創業メンバーで会社をある程度までもっていくことが肝要で、黒字化後は人材採用が容易になるとの経験則が披露されました。



郷治 友孝氏

パネルディスカッションでは、創業から3~5年経過した東京大学関連ベンチャー企業の経営者が一堂に参集しました。趙長明氏(アドバンスト・ソフトマテリアルズ(株)取締役副社長)、矢崎雄一郎氏(テラ(株)代表取締役社長)、清松哲郎氏(株セルクロス 代表取締役社長)、平賀督基氏(株モルフォ代表取締役社長)、出雲充氏(株ユーグレナ 代表取締役社長)の5名の方々です。各社の現状報告の後、企業の将来像、経営トップや人材育成など多岐にわたり会場との活発な質疑が交わされました。

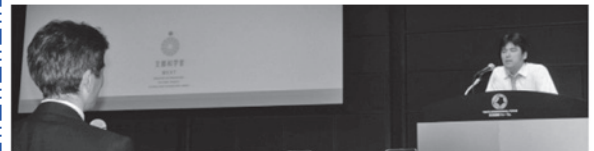
セミナーは120名を超える参加者を得て盛況でしたが、テーマの関心の度合いを示しているのか、アンケートでは、もっとベンチャー経営者の話が聞きたいとの指摘が寄せられました。



写真右から、郷治友孝氏、高井正美氏、出雲充氏、平賀督基氏、清松哲郎氏、矢崎雄一郎氏、趙長明氏、各務茂夫教授

イノベーション・ジャパン2008 大学見本市開催される

~産学連携プロポーザルに 多くの来場者が注目~



講演会場にて、ソフトウェアの著作権について会場からの質問に答える本間高弘特任教授。

9月16日(火)~18日(木)の3日間、JST、NEDO主催による、「イノベーション・ジャパン2008-大学見本市」が、東京国際フォーラム(有楽町)で開催されました。産学連携本部は、展示会場ブースに出展し、「産学連携プロポーザル」の説明と案内に力を入れました。来場者の関心は高く、チラシやポスターを興味深く眺めたり、PCを使ったオンライン実演を見つめて質問したりする人の姿が見られました。

17日(水)の12時30分~17時まで開催された文部科学省研究振興局主催の企画プログラム「イノベーションの創出に向けた大学の産学官連携戦略~大学の特色と持続可能な産学官連携戦略~」では、本間高弘特任教授が、「ソフトウェア等の著作権の管理・活用について」というテーマの調査研究結果を発表しました。各大学も共同研究における著作権についての悩みは共通のようで、発表後の質疑応答では、意見や質問が相次ぎ、活発な討論が行われました。

3日間の来場者合計は約3万人で、盛況に終わりました。



展示会場にて、来場者に産学連携プロポーザルの説明をする清水雅晴テクノロジー・リエゾン・フェロー(左)。

連絡先:産学連携本部(本部産学連携グループ)

電話:内線22857(外線03-5841-2857)

ホームページ:<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索

DUCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo



ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～ No.12



今どきケータイ事情！ その2

携帯電話で動画を見よう！

9月より始まりました「今どきケータイ事情」！めまぐるしく変わる昨今の携帯事情を隔月でお伝えします。ケータイ最新情報や教育分野における活用情報など幅広く扱います。今回は、ここ数年急激に普及した、携帯電話での動画視聴についてです。

近年携帯電話の性能向上により、これまでは難しかった大容量のデータの処理が可能となってきました。それを受け、2002年にはmp3フォーマットなどの音声ファイルを携帯電話で再生し、音楽を聞いたり着信音にできる「着うた」などのサービスが始まり、また2005年頃からは、携帯電話に特化してフォーマットされた動画を視聴できる携帯電話が、携帯電話キャリアから発売されるようになりました。

昨年の調査によれば(※1)、携帯電話ユーザのうち、習慣的にモバイル動画を利用しているのは全体の3割で、全体の4割のユーザがモバイル動画を利用したいと考えているとのこと。現在では発売されているほとんどの携帯電話で動画が視聴できるようになっており、PCでもおなじみのYoutubeなどの動画共有サイトでも、携帯電話用のページが用意され人気を博しています(下図)。今後教育用途でも、携帯電話ならではの可搬性や手軽さを生かした教材の提供など、様々な取り組みが広がっていくでしょう。

しかし携帯電話で動画を利用する際に、一つ気をつけなくてはならないのが、動画のフォーマットやサイズなど、各キャリアに応じた対応が必要な点です(詳細は下の表)。最近では3キャリアの動画配信に対応したモバイルCMS(Content Management System)も出はじめており、このようなサービスを使うのも有効な手段のひとつかもしれません。

キャリア	拡張子	動画フォーマット	音声フォーマット	容量上限
Docomo	3gp	MPEG4	AAC/AMR	~10MB
Softbank	3gp	MPEG4	AMR	~300KB
AU	3g2	MPEG4	AAC/AMR	~1.5MB

キャリア別 動画対応状況



携帯電話版 Youtube
URL: <http://m.youtube.com/>

参考：各携帯電話キャリア 動画再生フォーマット技術情報

■Docomo
<http://www.nttdocomo.co.jp/service/imode/make/content/imotion/mp4/about/index.html>

■KDDI au
<http://www.au.kddi.com/ezfactory/tec/spec/ezmovie01.html>

■Softbank
http://creation.mb.softbank.jp/oters/movie_about.html

※1 モバイルサーチwith goolによる調査結果：
<http://japan.internet.com/allnet/20070619/5.html>



東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！



東大ナビ はじまる

ケータイでお得なイベント情報をGET!

詳しくは utnav.jp にアクセス。
または mail@utnav.jp に空メール!

東京大学 教育企画室



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信！

- この記事のQRコードから
 - mail@utnav.jp宛てにメール送信
 - 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!



イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込みます

- <http://utnav.jp>にアクセス
 - イベント掲載フォームから送信！
 - 追ってスタッフよりご連絡致します
- 教育企画室TREEオフィスまで！
- 内線；27823（重田）
 - メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
 - オフィス；本郷キャンパス 第二本部棟401号室



「インタープリター」を解釈する

石原孝二

総合文化研究科 准教授

科学技術インタープリター養成プログラム担当

11年間住んだ札幌を離れ、今年の4月から駒場キャンパスで勤務している。前任校でも同種のプログラムに関与していたが、こちらでも科学技術インタープリター養成プログラムに参加することになった。本郷で大学院生だったときには、ハイデガーやフッサールなどの近現代哲学を研究対象にしていたので、今こうしたプロジェクトに参加しているというのは何か不思議な感じがする。

一般に、サイエンスコミュニケーションや科学技術コミュニケーションを担う人材を指す言葉として、「コミュニケーター」と「インタープリター」の二つが使われている。この二つはあまり区別されることなく、科学技術の情報を分かりやすく伝え、専門家と市民との間をつなぐ役割を果たす人」というような意味で使われているように思われるが、字義通りには、「コミュニケーター」は「伝える者」で、「インタープリター」は「解釈(説明・通訳)する者」という意味である。「インタープリター」の方が「解釈する」ということにより重点を置いているような印象がある。

「解釈」は人文学や哲学にとっても重要な概念であるが、近代解釈学を確立したシュライエルマッハーの言葉に「筆者以上に筆者を理解する」というものがある。解釈者が解釈対象となるテキストとは異なった言語共同体・文化圏に属している場合、そのテキストを理解するためには、解釈者は筆者以上に筆者が置かれていた状況や意図をよく理解しなければならない、ということである。科学技術コミュニケーションにこのことをあてはめてみた場合、科学者・技術者のコミュニティに属していない解釈者は、科学者・技術者たちを彼ら以上によりよく理解しなければならない(理解できる?)、ということになるだろう。

もちろん、テキストから筆者の意図や思考を再構成しようとする解釈学的な営為と、科学技術の知識を分かりやすく伝えようとする科学技術インタープリターの活動は同じではない。しかし、インタープリターの役割は、単に科学技術の知識を分かりやすく伝えることだけにあるわけではなく、科学者・技術者や、科学技術の知識そのものが置かれている社会的文脈を科学者・技術者以上に理解しながら知識を媒介していく必要があるという点において、共通性があると言えるだろう。インタープリターは、(科学者・技術者であってもインタープリターの活動においては)科学者・技術者コミュニティの外部の視点に立つ必要があるのではないだろうか。

★科学技術インタープリター養成プログラム

URL:<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/>

コミュニケーションセンターだより No.53

■卒業生に送付される「赤門学友会報」にコミュニケーションセンターのチラシを同封しました！！

東京大学卒業生に送付される「赤門学友会報」に、この度コミュニケーションセンターのチラシを同封しました。表面には、戦前の黒麹菌を使用したご存知「御酒」を、裏面にはコミュニケーションセンターのコンセプトや、取り扱い商品を一部掲載致しました。卒業生宅に配布された当日から、沢山の問い合わせのお電話を頂きました。21,000円の「熟成古酒 御酒」をお求めになられるお客様も、今までとは比較できないほどたくさんいらっしゃいました。

東京大学創立130周年を記念した「熟成古酒 御酒」は、外見もとても素敵です。ぜひコミュニケーションセンターにて、実物をご覧ください。



■UTCCスタッフを紹介します!!



教養学部前期課程理科二類
2年
久保田 早苗

(担当：コミュニケーションセンター 山下)

はじめまして。UTCCスタッフの久保田です。今回は私の一押し商品「蓮香オードパルフム」をご紹介します。時は1951年、東京大学の大賀一郎博士が、東京大学検見川厚生農場で推定2000年以上前のものとされる古代蓮の種を3粒発掘し、その後の研究で1粒のみ開花に成功しました。大賀博士の名から、その蓮は「大賀蓮」と名づけられました。2000年の眠りから覚めた蓮、ロマンチックですよ。UTCCではこのように東大の研究成果商品を多数取り揃えております。皆様のご来店、心よりお待ちしております！！



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30

電話：03-5841-1039

<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp>

ワタシのオシゴト / 第33回

Rings around the UT

柏地区宇宙線研担当課総務係長

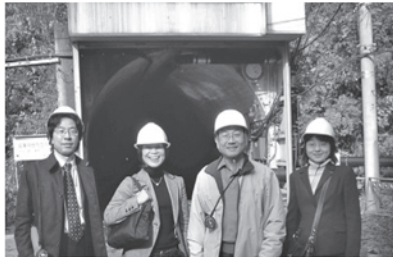
瀬戸 美香子さん

宇宙船じゃないっ！



デスクにて(なかなか片付きません)

宇宙線研究所は柏キャンパスの東にこぢんまり佇む小さい研究所ながら、スーパーカミオカンデを擁する神岡施設を始め、乗鞍、明野、海外にも観測地点が点在する国際的な研究所です。これら地域への出張手続き、会議開催、人事選考から某S社のエレベータ不具合対応まで、係の所掌は種々雑多です。私がストレスなく仕事を進められるのは、ひとえに先生方のフットワークが軽いおかげです。事務的なお願い事をして、後回しにされたことはありません。ここまで密に接してもらったことがないくらい、どっぷり宇宙線研究所に嵌っています。プライベートでは物性研の秘書さん率いるジョギングサークルや新領域留学生の韓国語講座に参加するなど、部局横断的(?)に柏キャンパスライフを満喫しています。最近覚えた韓国の諺：하늘이 무너져도 솟아날 구멍이 있다(天が崩れても這い出る穴はある)



神岡坑内見学は
ヘルメットと
懐中電灯が必須



事務室のみなさん
プラス所長と

得意ワザ：ツッコミ

自分の性格：明日できることは今日やらない

次回執筆者のご指名：倉光知恵さん

次回執筆者との関係：コワくてキレイな頼れる後輩

次回執筆者の紹介：彼女の誠実さには
いつも頭が下がります

ニュースページ、 インフォメーションページ への記事提出要領

「学内広報」は皆さんから送っていただく記事で作られています。下記の提出要領により、積極的に学内の情報をお寄せください。

1. 提出方法

記事は、各部局の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとしてデータで送付すること。

2. 締切日

本学HPの右下にある「学内広報アイコン」をクリックして発行スケジュールをご確認ください。

3. 提出の際の留意事項

(1) 文字数

文字数は記事1件につき800字を目安とし、内容により増減は可とする。

(2) 写真

- ① 写真を掲載する場合はキャプション(説明文)を25文字以内で添えること。
- ② 写真を電子データで提出する場合、Wordファイルなどに貼り付けず、jpeg等の形式による元の画像ファイルを送付すること。
- ③ 写真は電子データがない場合、プリントのものも掲載可とする。

(3) 書式

- ① 原稿は1行25文字の書式で作成すること(ただし、大きな図表などが含まれる場合は、この限りではない)。
- ② 原稿のはじめに担当部局名と記事タイトルを記載すること。
- ③ 記事タイトルは極力簡潔でわかりやすいものとする。

(4) 文章表現のきまり

- ① 句読点は「、」「。」を用いること(「,」「.」は用いない)。
- ② 時間は24時間表記とし、日付には括弧書きで曜日をつけること。
- ③ 記事内の人名は極力フルネームで表記。
- ④ この他、特に表記する必要のない「平成●年」は削除する、特に支障がない限り「東京大学」は「本学」とする等、表記統一のための修正を編集段階で行う。

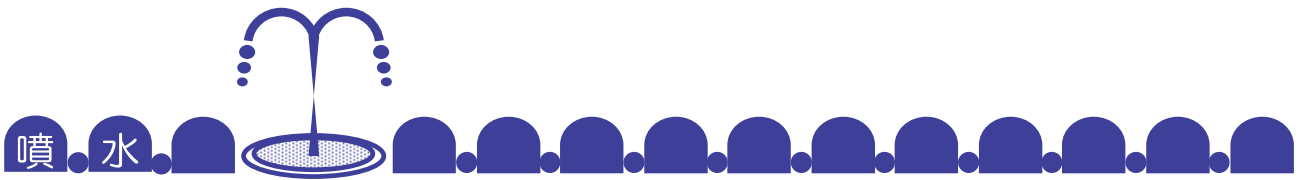
※編集スケジュールの都合上、原則として校正はできません。基本的にはいただいた原稿がそのまま掲載されますので、内容に間違いのないよう、十分ご注意ください。

4. 問い合わせ先・提出先

本部広報グループ 広報企画チーム

TEL: 03-3811-3393 内線22031

E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



教育学部附属中等教育学校で銀杏祭開催される

9月12日（金）～14日（日）、3日間にわたり教育学部附属中等教育学校において銀杏祭（文化祭）が開催された。今年度のテーマは「極意」。「この上ない最高の想いを銀杏祭という場で表現して欲しい」という銀杏祭実行委員会の思いのあらわれであった。この期待を裏切ることなく、全校生徒がそれぞれの力を発揮し、多くの来校者にも楽しんでいただける充実した3日間となった。

初日には調布グリーンホールにて開会式が行われ、華やかに今年度の銀杏祭の幕が上がった。3・4年生の総合学習である課題別学習「心とからだ」、「民俗芸能」、「管弦楽部」、「演劇部」の発表に加え、総合学習から発展して有志で組織されている和太鼓団体の勇ま

しい演技、フルートや歌・ダンスなど多彩な発表が行われ、全校生徒・教職員・保護者が生徒の多才ぶりに改めて感心し拍手を送った。

13日（土）、14日（日）に行われた本祭は、天候にも恵まれ、校内が熱気で暑くなるほど多くの方々にご来校いただいた。6年生の卒業研究の発表には例年通り熱心に聞き入る来校者の姿が見られた。1・2年生の総合学習、課題別学習、5年生の宿泊研修では、それぞれの学習の成果が発表され、学年を追うごとに成長していく生徒たちの様子に保護者の関心が集まった。

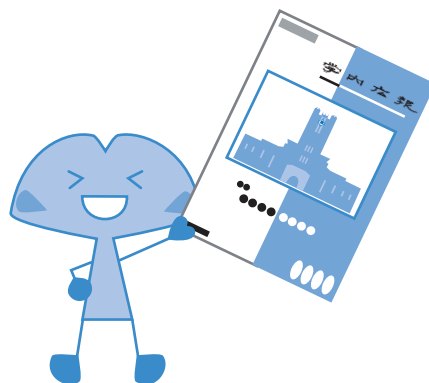
日頃積み重ねた練習や研究の成果を発表する文化部、多くの小学生を惹きつけた一般参加団体、心をこめて昼食を提供する食品団体、校内の楽しい雰囲気を盛り上げたアーチ・装飾部門、陰で銀杏祭を支える校内管理部門等々、皆がそれぞれの役割を果たし銀杏祭という一つの形に表現することが出来た。



開会式での1年生の合唱



学校の正門





第55回国際理解・国際協力のための高校生 の主張コンクールで優良賞

10月18日(土)、港区男女平等参画センター5階ホールで開催された「第55回国際理解・国際協力のための高校生主張コンクール」東京都大会(主催:日本国際連合協会東京都本部・東京都)において、「世界に平和が訪れる日を目指して」と題して、教育学部附属中等教育学校5年生の岡部憲和君が発表を行い、優良賞を受賞した。

この発表会は、国際連合・国際理解・国際協力に関する高校生のフレッシュな意見を述べる会で、参加者の学校や家庭などでの国連に関する勉強の成果、海外留学やボランティアの体験などの実践を通して、国際連合についての主張を述べることを目的としている。岡部君は、すでに数々の論文を書き、多数の受賞をしている。

発表後、「2つのNPOを通じて、植樹や間伐などの活動に参加して、そのことが、国際平和につながっていることを実感した。また、自分の考えが発表できてよかった」と感想を述べてくれた。

当日引率した、中等教育学校の土屋香澄教諭(社会科)は、「森を研究することにより、韓国の人と出会い、森の良さを伝え広げ、そこから国際平和を考えていくという、独自の方法を用いていて、他の発表とは異なっていて良かった」と感想を述べている。

今後も岡部君の活躍に期待したい。



受賞の様子

教育学部附属中等教育学校で「第2回三者協議会」が行われる

10月18日(土)10時~12時に教育学部附属中等教育学校において、2008年度第2回目の三者協議会が行われた(司会:国語科 大井和彦教諭)。生徒40名、保護者30数名、教員16名の計86名が参加した。今回の議題は「気持ちの良いかかわり方とは?~許せる範囲、許せない範囲」。はじめに、司会の大井教諭が、平成20年度全国学力・学習状況調査の「規範意識」の項目に関して、本校の結果と全国平均の比較を示された。その上で、今回の会において、人とのかかわりにおける「許せる範囲」、「許せない範囲」の判断基準について意見交換をし、他人とのよい関係づくりを模索することを提案された。会の前半では現状把握をするため、①社会、②家庭、③学校の各場面について、許せる、許せない範囲に関して意見交換がされた。①では、電車内での食事についての議論に時間が割かれた。「匂いがしなければいい」、「通勤時間帯ではなく混んでいない時間帯ならいい」という意見がある一方、旅行などで利用する長距離列車を別にして、電車内において食事をする行為は「プライベートと公の区別ができていない」という意見が出された。②では、家庭での生徒と保護者の会話や家事の手伝いについて話された。5年生の女子生徒が「家事掃除を分担している。家族内の会話が苦手だから家事を手伝うことで家族の一員としていられる」と述べた。③では、盗難に関する意識や校則などのルールが守られているかについて話された。会の後半では、人とのかかわりかたを良くするための改善策について議論された。本校生徒会長の5年生赤迫寛くんは「生徒会が何かやらなければならない」と述べた。最後に、村石幸正副校長は「生徒会の方針を教師集団がサポートする」と確認した。今回の協議会では、名古屋大学教育学部附属中・高等学校の教員1名、生徒4名、PTA代表1名が見学された。名大附の先生は「東大附は話し合う文化ができています」と感想を述べられた。



三者協議会の様子



第32回東京大学伊豆・戸田マラソン大会 が開催される

恒例の東京大学伊豆・戸田マラソン大会が、10月26日（日）に開催された。コースは、静岡県西伊豆の東京大学戸田寮（沼津市戸田地区）を起点とする42.195kmのフルマラソンコース、西浦市民窓口横を起点とする21kmのハーフマラソンコースがある。途中で標高差500mの山道を含むなど、通常に比べかなりの難関コースだが、日本有数の景勝地として知られる西伊豆の自然を体感しつつ走ることができるため、参加者から例年好評を博している。



片岡さん新記録樹立

大会当日は朝から強風と時折の雨に見舞われ、選手・スタッフともに厳しいスタートとなったが、総勢114名（卒業生12名、沼津市民9名等を含む）が無事に出走。結果、個人総合の部では昨年に続き、大学院生の片岡哲朗（かたおか・てつろう）さんが、第21回大会で安達裕司さんが記録したタイム2時間44分11秒を15秒上回る2時間43分56秒の大会新記録を樹立。ハーフマラソンでは、鈴木幸善（すずき・ゆきよし）さんが1時間50分4秒のタイムで、また団体の部では、在学生を中心としたチーム「弥生」が優勝した。なお、その他の出走者も好走し、106名がこの難コースを完走した。大会終了後に行われた閉会式では、ご後援をいただいている沼津市から斎藤市長がご出席され、沼津市長杯の授与と挨拶を賜り、本学関係者と地域関係者との好い交流の機会となった。コース沿道では、沼津市民の方々からたくさんの温かな声援が送られ、中にはお子様連れや車椅子でお越しになる方も見られた。最近忘れられがちな人情味に溢れた秋の西伊豆路を周回する伊豆・戸田マラソン。来年はどんなドラマが待っているのか、皆様のご参加をお待ちしています。



フルマラソンスタート風景

主な成績は以下のとおり。

第32回東京大学伊豆・戸田マラソン大会結果

【個人の部】＜東京大学総長杯＞

順位	氏名	時間	備考
優勝	片岡 哲朗	2:43:56	農・大学院生
準優勝	大井 寛己	2:53:37	卒業生
第3位	篠原 聡	2:59:36	卒業生
第4位	小川 直哉	3:05:22	農・学部生
第5位	牧田 浩典	3:10:57	教職員
第6位	貴田 大樹	3:13:22	農・学部生

【団体の部】＜沼津市長杯＞

（上位3位の平均順位が少ないチーム）

順位	チーム名	平均順位	備考
優勝	弥生	6.7	学部生・大学院生
準優勝	DOO-UPのおるすばん	10.3	学部生・大学院生
第3位	ウルトラマラソンを走る会	27	学部生

【女子の部】

順位	氏名	時間	備考
優勝	大田原 由紀子	4:19:09	農・学部生

【学内の部】

順位	氏名	時間	備考
優勝	片岡 哲朗	2:43:56	農・大学院生

【バカヤロー会長杯】（第二補給所～ゴール間で一番順位の変動が大きかったので第85位の方）

順位	氏名	時間	備考
第85位	野坂 知広	5:53:24	経済・学部生

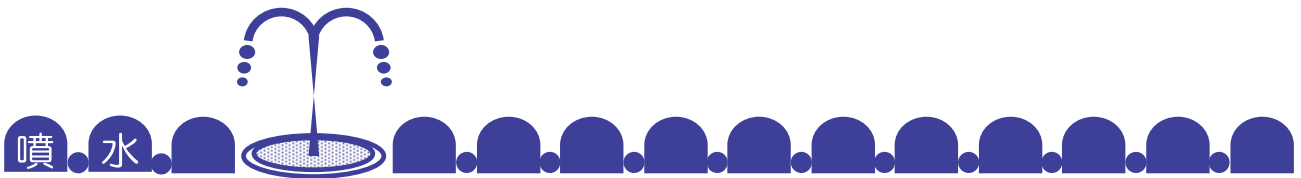
【ハーフマラソンの部】（男子の部）

順位	氏名	時間	備考
優勝	鈴木 幸善	1:50:04	沼津市民
準優勝	吉野 正巳	1:55:28	教職員
第3位	梅原 廣一	1:55:45	沼津市民

【ハーフマラソンの部】（女子の部）

順位	氏名	時間	備考
優勝	稲葉 五美	1:57:28	沼津市民

（本部学生支援グループ）



教育学部附属中等教育学校で第3回「学びの共同体」研究会行われる

10月27日（月）13時10分～17時まで教育学部附属中等教育学校、新教育棟の多目的室において、2008年度第3回目の「学びの共同体」研究会が行われた。

附属学校では、2005年度から「学びの共同体」づくりをはじめている。

校内の教職員41人と校外からの参加者20名の計61名で行われた。

授業①（13:10～14:00）は、1年B組で、数学科「比例の利用」（授業者：小張朝子教諭）であった。「直角三角形の1つの鋭角とその角の対辺の長さが比例するか」という課題に取り組んだ。実際に分度器と定規を用いて角度と長さの関係を調べ、比例しないことを生徒に説明させる授業であった。グループで話し合いをして、比例しないと結論づけた上で、扇形の中心角と弧の長さが比例することに気が付いた班があった。小張教諭はその意見を取り上げ課題と関連させて授業を発展させていた。

授業②（14:20～15:30）は、2年C組の健康・生活で、「からだのつくりと働き」（授業者：浅川俊彦教諭）であった。浅川教諭は、校内履の靴の踵を踏んでいる生徒たちがいる状況に気づき、授業の目標を「靴の正しい履き方を考える」に設定した。まず、靴を正しく

選択しない際の「トラブル」を生徒に考えさせた。つぎに、誤った靴を選ぶと起きる、さまざまなトラブルを説明した。そして、内反足か外反足か直足かを、紐に錘をつけた装置でグループごとに調べる実験を行った。生徒たちは、仲間の足を真剣に観察していた。

指導助言者の大学院教育学研究科の佐藤学教授は「授業①は、パーフェクトといっていい、よい授業であった。課題がしっかりと展開されていった。子どものつまづきに気付いて、そこからジャンプさせたのがよかった。授業②は、すてきな授業であった。靴と体について、ここまで追求した授業を、自分の学生時代にやってほしかった。ノートの取り方について、プリントをつくることで板書が減る。2年生の方がさすがに学び合いが上手にできている」と指摘した。さらに、「子どもたちのおしゃべりが気になる」と指摘し、その改善策としては①教師がおしゃべりを減らし、話すことばを選ぶこと、②課題がやさしすぎるので、高めにすること、③教師が生徒に学び合いをさせる力量をつけることの3点を提案した。また、プロ級の教師を目指すために「無駄な動きをしない」、「よく子どもを見る」ことが大切であると述べた。

今回の「学びの共同体」研究会は2009年1月30日（金）、また、全校での「公開研究会」は、2月14日（土）を予定している。



授業①の様子



授業②の様子

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

生物生産工学研究センター

平成 20 年度生物生産工学研究センターシンポジウム開催のお知らせ

生物生産工学研究センターでは毎年、センターの研究成果の紹介と関連分野の研究者との交流を目的にシンポジウムを開催しています。本年は文部科学省特定領域研究「植物膜輸送」(代表 西澤直子農学生命科学研究科教授)との共催で、弥生講堂にて12月5日(金)13時から12月6日(土)夕刻まで2日間にわたって開催することとなりました。今回のシンポジウムでは、今後の食料問題や環境問題の解決に資することが期待される植物と土壤微生物の共生や植物の栄養環境応答等を主要テーマとして、国内の研究者10数名の方々にご講演頂く予定です。主な講演者は以下の通りです。詳細なプログラムにつきましては、

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/ppk/2008symp.htm>を御覧いただければと思います。皆様の御来場を心よりお待ちしております。

生物生産工学研究センター長 五十嵐泰夫

<講演予定者>

12月5日(金)13:00より

日高 真誠(東京大学)

青野 俊裕(東京大学)

江澤 辰広(北海道大学)

小八重善裕・畑 信吾(名古屋大学)

佐藤 修正(かずさDNA研究所)

小柳津 広志(東京大学)

矢崎 一史(京都大学)

川口 正代司(東京大学)

12月6日(土) 9:30より

神谷 岳洋(東京大学)

吉田 久美(名古屋大学)

藤原 徹(東京大学)

高橋 秀樹(理化学研究所)

小林 高範(東京大学)

12月6日(土) 13:15より

小山 博之(岐阜大学)

三浦 謙治(筑波大学)

高野 順平(北海道大学)

吉村 悦郎(東京大学)

内藤 哲(北海道大学)

シンポジウム・講演会

環境安全研究センター

第18回 環境安全研究センターシンポジウム「循環型社会のデザインー資源・リサイクル・廃棄物処理の全体像ー」

ここ数年来、石油をはじめとして多くの資源価格の高騰が続き、ガソリンや食料品・家電製品などの値上がりといったさまざまな形で身近な生活にも影響を与え始めています。循環型社会の構築にも大きな影響が出てきており、日本国内においてリサイクルや廃棄物処理のより良い施策や技術開発は着実に進められている一方で、資源確保への不安やリサイクル回収品の海外流出など大きな変化が生じてきています。このような状況の変化のなかで、物質の流れに沿った、資源の生産から消費、廃棄、リサイクルは互いに深く関連する一連のものであり、個々の分野を扱うだけでは循環型社会全体を見通せなくなってきています。循環型社会を推し進めるには、個々の状況を把握したうえで、全体を大きく眺める視点から社会のデザインを再検討することが求められていると言えます。本シンポジウムではこのような再考の手助けになるべく、資源循環・リサイクル・廃棄物処理・将来の資源供給について、本学の5名の研究者が講演を行います。

日時： 12月25日(木) 13時15分～17時

場所： 弥生講堂・一条ホール

(〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1 東京大学弥生キャンパス)

参加費：無料

<プログラム>

第一部

「挨拶」尾張 真則 環境安全研究センター長

「特別講演～太陽系外惑星系-第2の地球を探して-」

岡村 定矩 理事・副学長

「国際的な資源の循環とその課題」

橋本 征二 新領域創成科学研究科・国立環境研究所
「国内マテリアルストックとリサイクルポテンシャル」
松野 泰也 工学系研究科
「廃棄物処理の課題と展望」
山本 和夫 環境安全研究センター
「海洋鉱物資源開発の展望」
玉木 賢策 工学系研究科附属エネルギー・資源フロンティアセンター長
「鉱物資源供給の課題とわが国の対応」
安達 毅 環境安全研究センター

参加申込：往復はがきまたはメールにて、住所・氏名・電話番号・職業をご記入の上、12月11日（木）までに以下の宛先までお申込み下さい。（返信用はがきにも住所・氏名をご記入下さい）
問合せ・参加申込先：環境安全研究センター（<http://www.esc.u-tokyo.ac.jp/>）
〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号
E-mail：escsympo@esc.u-tokyo.ac.jp

シンポジウム・講演会

大学院工学系研究科・工学部

東京大学グローバルCOE「セキュアライフ・エレクトロニクス」シンポジウム～21世紀の社会は先端エレクトロニクスでどう変わる～

グローバルCOE「セキュアライフ・エレクトロニクス」主催によるシンポジウム「21世紀の社会は先端エレクトロニクスでどう変わる」を、2009年1月20日（火）～21日（水）の2日間、本郷キャンパス（浅野地区）武田ホールにて開催します。

21世紀に入り、エネルギー資源の枯渇や地球温暖化、高齢化社会の到来、さらに我々が利便性を享受している様々な構造物や情報通信技術は本当に安全なのか、などの問題が顕在化しつつあります。このような社会環境の変化の中で、我々の“生活の質”を向上させようという試みが、近年非常に重要になりつつあります。

今回、「セキュアライフ・エレクトロニクス」のキーワードの下、先端エレクトロニクスがいかに我々の“生活の質”の向上に深く関与し、明るい未来社会の構築に貢献するのかを、最新の研究成果を交えながら議論をしたく、シンポジウムを企画しました。予定プログラムにつきましては、下記をご覧ください。

関連する各分野の6名の著名研究者による招待講演と、本グローバルCOE研究者のうち14名による最新成果の発表を行います。また実際に成果を実感していただけるデモンストレーション、そして本グローバルCOEを構成する約60の研究室によるポスター発表を行います。

す。そして安全安心な社会の構築を目指す新たな方向について議論します。多数の方々のご参加をお待ちしています。（参加費は無料です。）

東京大学グローバルCOE「セキュアライフ・エレクトロニクス」シンポジウム
～21世紀の社会は先端エレクトロニクスでどう変わる～

日程：2009年1月20日（火）、21日（水）
場所：本郷キャンパス 武田ホール

―― 招待講演 ――

**安全・安心に向けた情報通信研究機構の取り組み
―テラヘルツ電磁波のセキュリティ応用―**

神谷武志／寶迫巖（独）情報通信研究機構

安全・安心のためのミリ波パッシブセンシング

水野皓司 東北大学電気通信研究所

航空宇宙複合材構造分野における構造ヘルスマモニタリングの新展開

武田展雄 東京大学大学院新領域創成科学研究科先端エネルギー工学専攻

環境・セキュリティのためのソリューションビジネス

久間和生 三菱電機株式会社

量子情報処理技術の進展と大学連携

國尾武光 日本電気株式会社

エネルギー環境問題への長期的対応戦略

茅陽一（財）地球環境産業技術研究機構

―― 本グローバルCOEメンバーによる講演 ――

<新しい電磁波技術の開拓とセキュアライフのためのセンシング応用>

廣瀬明

森川博之

<“痛みわかる”センシングと制御の最前線>

保立和夫／何祖源

呉世訓／堀洋一

<量子ナノ構造が拓くセキュアな通信と情報処理技術>

荒川泰彦

菊池和朗

大津元一

<先端エレクトロニクスと人・生命・社会をつなげて拓くセキュアライフ>

杉本雅則

藤島実

高宮真

藤田博之

小野亮

<エネルギーはセキュアライフの源>

田島道夫

横山明彦

組織委員長:保立和夫(電気系グローバルCOE拠点リーダー)

プログラム委員長:平川一彦/廣瀬明

問い合わせ先:電気系COE支援オフィス

Tel: 03-5841-6793 FAX: 03-5841-1160

E-mail: coe21@ee.t.u-tokyo.ac.jp

プログラムなどの詳細はホームページをご参照ください。

また、ホームページより参加登録をお願いします(当日参加も可能です)。参加費は無料です。

<http://www.ee.t.u-tokyo.ac.jp/gcoe/>



お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第515(11月5日)号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

第515号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

植田一博・岡田猛: behind the seen

アート創作の舞台裏

加藤道夫: 新たな共同体建築へ——駒場コミュニケーション・プラザでの試み

北川東子: 「多元性」と「連帯」からの哲学

「世界哲学会議」と「国際女性哲学者連合」ソウル大会に出席して

山脇直司: グローバル化時代における哲学の社会的役割——最近の国際会議の経験から

本村凌二: 地中海学会賞 + 「体験考古学」続編
数理科学研究科: 小林俊行教授がフンボルト賞(数学部門)を受賞

鈴木真澄: 『バリアフリー支援室』って、どんなところ?

〈本の棚〉

高橋直樹: 森政稔著『変貌する民主主義』

現代デモクラシーのよきガイドマップ

〈お知らせ〉

第4回選抜学生コンサート

室内コンサート第6回演奏会

第4回室内楽演奏会

お知らせ

学生相談ネットワーク本部

三浦雄一郎氏 講演会

～75歳、エベレスト登頂への挑戦～

学生相談ネットワーク本部では、10月から全学自由研究ゼミナールとして、教養学部前期課程学生を対象に「人間力の実践知一心の体力をいかに育むか」を開講しており、その開講記念として、本講演会を開催します。講師には、今年75歳でエベレスト登頂に成功した三浦雄一郎氏をお願いしました。三浦氏は、立ちをはかる幾多の苦難にめげず、青年期からの夢を追い続けてこられました。今回の登頂も、2度の心臓手術を乗り越えての成果だと聞いています。まさに、われわれが目指す「人間力の実践知」を体現する生きたモデルともいえます。本講演では、その真髄を語っていただきます。

開催日時: 12月8日(月) 18:30～20:30

開催場所: 安田講堂

定員: 1,000名 ※要事前予約(先着順)

参加費: 無料

対象: 本学学生・教職員、一般(高校生以上)

主催: 学生相談ネットワーク本部

■プログラム概要

18:30～18:40 開会の挨拶 総長 小宮山 宏

18:40～20:20 講演・DVD上映

「75歳、エベレスト登頂への挑戦」

三浦 雄一郎 氏

20:20～20:30 閉会の挨拶 学生相談ネットワーク本部

本部長 古田 元夫

■参加登録

(1) ホームページからの申込

<http://dcs.adm.u-tokyo.ac.jp/event-sp/>

(2) 携帯からの申込

<http://dcs.adm.u-tokyo.ac.jp/event-sp/form-i.html>



(3) FAX での申込

03 (5841) 0333 へ参加申込用紙を送信してください。

※参加申込用紙は、正門・赤門・農正門・弥生門にて配布中。

■問い合わせ先

E-mail : nandemo@adm.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

情報基盤センター

“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

レポート・論文の執筆や、ゼミ発表の準備の際、どのようにして必要な文献を入手していますか？文献探して困ったことはありませんか？

情報基盤センター図書館電子化部門では、“情報探索ガイダンス” 各種コースを実施しています。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー
(先着12名。予約不要。直接ご来場ください。)

●日程・コース概要：

■12月8日(月) 11:00～12:00 自宅から検索するには？

自宅からも文献検索をしたいと思いませんか？このコースでは、学内・学外を問わず利用できる無料公開のデータベース・電子ジャーナルや、ECCSアカウントによる認証で学外から利用可能になるサービスなどを紹介します。

■12月10日(水) 15:00～16:30 文献検索早わかり(＋リッテルナビゲーター) コース (※12月限定)

前半は、図書や電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事など、各種の文献検索方法を、まとめてコンパクトに解説します。

後半は、“書籍検索の道しるべ”「リッテルナビゲーター (<http://u-tokyo.navi.littel.jp/>)」の使い方を、開発者の清田陽司氏(情報基盤センター助教)に解説いただきます(今回限定)。

以前「文献検索早わかり」コースを受講した方は、後半(15:45頃)から)だけ参加することも可能です。ぜひご参加ください。

■12月11日(木) 13:30～14:30 日本の論文を探すには？

日本国内の雑誌論文は、どうやって検索していますか？このコースでは、日本の論文を探すときの代表的なデータベース、CiNii(サイニイ)の使い方を中心に解説します。

■12月11日(木) 15:00～16:00 中国の論文を探すには？(※12月限定)

中国の学術雑誌の全文データベース、CNKIの使い方を解説します。提供元の東方書店より講師を招いて開催する今回限定コースです。ぜひご参加ください。

■12月18日(木) 15:00～16:00 電子ジャーナルを利用するには？

電子ジャーナルを使えば、欲しい論文の本文が、Webで簡単に見られます。このコースでは、代表的な学術出版社の電子ジャーナルサイトを例にとり実際の利用方法を解説します。また、“UT Article Link”を使ってデータベース検索結果から電子ジャーナルへアクセスする方法も紹介します。

●参加費：無料

●開催情報を見逃さないために、メールマガジンをご活用ください！

当係が発行するLitetopi(リテトピ)メールマガジンは、本学所属の方を対象に、各種データベースのニュースや、ガイダンス・講習会のご案内などのトピックスをお届けするメールマガジンです。配信ご希望の方は、下記までメールでご連絡ください。(無料)

●出張講習会、随時受付中です！

授業やゼミなどに、出張します。ご希望の日時、会場、内容、人数、連絡先を、メールで下記までご連絡ください。(無料)

ご希望の内容・レベルに合わせて、講習します。

(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

●問い合わせ：

学術情報リテラシー係

TEL：03-5841-2649(内線：22649)

E-mail：literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

お知らせ

大学院工学系研究科・工学部

IAESTE 帰国者報告会 開催のお知らせ

IAESTE（イアエステ）では、下記により IAESTE 帰国者報告会を開催します。

IAESTE は、理工農薬学系学生に海外の企業や大学等での国際インターンシップを仲介している国際非営利団体です。1948 年にヨーロッパで発足し、現在 80 カ国余りの国々が IAESTE に加盟しています。ユネスコ等を諮問団体として、全世界 5000 社に及ぶ企業・大学の後援を軸に、これまでに延べ 30 万人近い学生へ国際インターンシップの場を提供してきました。IAESTE 研修は、専門分野における広い視野や国際感覚を始め、他では得ることのできない貴重な経験を与えてくれるはずです。IAESTE 維持会員校の一つである本学では、毎年多くの学生が IAESTE 国際インターンシップに参加し、活発な国際交流が行われています。

今回、IAESTE の国際インターンシップを通じて海外で研修を終えられた方々による帰国者報告会への参加者を募集しています。当日は、帰国者に貴重な体験のお話をしていただき、パネルディスカッションを行う予定です。パネルディスカッションでは、「IAESTE について」、「国際インターンシップについて」など帰国者や、現在様々な分野で活躍なさっている方々をお招きし、お話をしていただきます。国際インターンシップに興味がある理系学生の方は、是非お気軽に足をお運びください。

●説明会概要●

日時：12 月 13 日（土） 14:00～17:00

場所：

早稲田大学 大久保キャンパス 55 号館 1 階大会議室

内容：

- | | |
|---------------|-------------|
| ① IAESTE 説明 | 14:00～14:20 |
| ② 研修報告 | 14:20～14:50 |
| ③ パネルディスカッション | 15:00～15:40 |
| ④ 茶話会 | 16:00～17:00 |

入退室自由・入場料無料です。詳細は多少変更することがございます。以下のホームページでご確認ください。

(PC) : <http://iaeste-tlsc.jp/haken>

(携帯) : <http://iaeste-tlsc.jp/rs/index-08>

お知らせ

本部学生支援グループ

「秋の三四郎池再発見ウィーク」が開催されました & SiLR（三四郎池のランドスケープ・リノベーション）最終報告会が開催されます！

SiLR（三四郎池のランドスケープ・リノベーション）では、10月28日（火）から11月3日（月・祝）にかけて、三四郎池（本郷キャンパス育徳園心字池）において「秋の三四郎池再発見ウィーク」を開催しました。パネル展示・自然観察会ともに多数の来場者があり、好評を頂きました。ありがとうございました。

SiLR は、本学創立 130 周年記念の学生企画として実施されているもので、学生と大学が共同で三四郎池に関する調査および整備方針の検討を進めています。12月21日（日）には、本郷キャンパス内情報学環・福武ホールにて SiLR の最終報告会が開催されます。「秋の三四郎池ウィーク」にて展示させて頂いた調査結果のほかにも、今後の三四郎池の整備・管理指針案について発表させていただく予定です。今後の三四郎池のあり方について広く皆様のご意見・ご議論を頂きたいと考えていますので、ぜひご参加ください。なお、本イベントの詳細については、SiLR の HP をご覧ください。（<http://www.silr.org/>）

SiLR の取り組みについての問い合わせ先：

本部学生支援グループ（内線 22524）担当：渡邊



案内板と三四郎池に向かうひと

お知らせ

情報基盤センター

福武ホール実習室開室時間のお知らせ

情報基盤センターでは、本郷キャンパス 情報学環・福武ホールの地下1F実習室に教育用計算機システム(ECCS)のiMac 端末20台とプリンタ1台を設置しています。

福武ホール実習室は平日9:00～18:00に開室しています。教育用計算機システムのアカウントをお持ちであればどなたでも利用出来ますのでぜひご利用ください。

場所は、図をご覧ください。

実習室には1F正面出入口を通して入ることができます。地下1Fに通じる外階段から実習室に入ることにはできません。

2008年度冬学期からは、教育用計算機システム相談員が実習室に勤務することになりました。

参考：

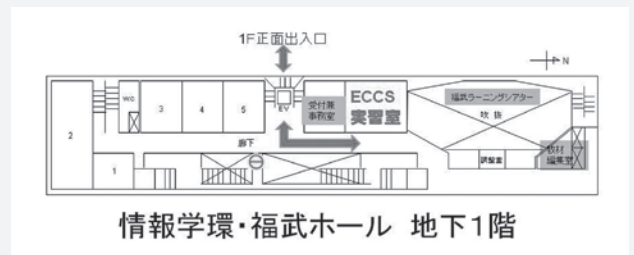
http://www.ecc.u-tokyo.ac.jp/announcement/2008/10/17_1111.html

●問い合わせ

情報教育支援係

TEL：03-5841-3004（内線23004）

E-mail：ecc-support@ecc.u-tokyo.ac.jp



情報学環・福武ホール 地下1階

実習室の位置

事務連絡

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
20.10.31	西山 友貴	辞 職	大学院医学系研究科准教授
（採 用）			
20.10.16	樋口 理	医科学研究所准教授	東京医科歯科大学難治疾患研究所准教授
20.11.1	三宅 なほみ	大学院教育学研究科教授	
20.11.1	佐々木 裕次	大学院新領域創成科学研究科教授	
（昇 任）			
20.10.16	池上 高志	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
20.10.16	楊 凱栄	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
20.10.16	吉田 丈人	大学院総合文化研究科准教授	大学院総合文化研究科講師
20.11.1	北山 丈二	大学院医学系研究科准教授	大学院医学系研究科講師
20.11.1	本田 由紀	大学院教育学研究科教授	大学院教育学研究科准教授
20.11.1	酒井 康行	生産技術研究所教授	大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター准教授
20.11.1	横山 祐典	海洋研究所准教授	大学院理学系研究科講師

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

Contents

特集

- 02 リチャード C. レビン イェール大学学長に名誉博士称号を授与
06 平成 20 年度第 1 回学生表彰「東京大学総長賞」授与式開催

NEWS

一般ニュース

- 08 本部研究推進グループ
「東京大学稷門賞」授賞式が挙行される
09 本部学生支援グループ
東京大学山中寮内藤セミナーハウス新営その他工事安全祈願祭（起工式）が執り行われる
09 海洋アライアンス
第 1 回イブニングセミナー開催
10 本部キャリアサポートグループ
博士課程学生・ポストドクター対象企業説明会開催
11 学生相談ネットワーク本部
第 2 回教職員のための「学生のメンタルケア」講習会を駒場キャンパスで開催
11 本部キャリアサポートグループ
知の創造的摩擦プロジェクト第 7 回交流会開催
12 環境安全本部
「第 1 回 関東甲信越地区大学安全衛生研究会」開催される
12 本部総務グループ
名誉教授懇談会の開催

部局ニュース

- 13 社会科学研究所
グローバル COE プログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」連携拠点がスタート
14 大学院情報理工学系研究科、大学院情報学環
東京大学、アルスエレクトロニカ 2008 でキャンパス展を開催
14 大学院総合文化研究科・教養学部
「食」をテーマにしたシンポジウムを開催
15 「卓越した若手研究者の自立促進プログラム」医科学研究所、分子細胞生物学研究所、物性研究所、地震研究所「卓越した若手研究者の自立促進プログラム」シンポジウム開催
16 医科学研究所
「慰霊祭」行われる
16 大学院総合文化研究科・教養学部
初年次活動センター竣工記念式典開催される
17 生産技術研究所
「第 4 回駒場キャンパス技術発表会」開催される
18 大学院総合文化研究科・教養学部
総合文化研究科・教養学部で留学生見学旅行を実施
18 分子細胞生物学研究所
動物慰霊祭が行われる
19 史料編纂所
アフタヌーンセミナー 2008 の開催
20 東洋文化研究所
第 8 回東京大学東洋文化研究所公開講座が開催される

コラム

- 21 Crossroad 産学連携本部だより vol.36
22 ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～ No.12
23 インタープリターズ・バイブル vol.18
23 コミュニケーションセンターだより No.53
24 Relay Column「ワタシのオシゴト」第 33 回
25 噴水 教育学部附属中等教育学校で銀杏祭開催される
26 噴水 第 55 回国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクールで優良賞
26 噴水 教育学部附属中等教育学校で「第 2 回三者協議会」が行われる
27 噴水 第 32 回東京大学伊豆・戸田マラソン大会が開催される
28 噴水 教育学部附属中等教育学校で第 3 回「学びの共同体」研究会行われる

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- 29 生物生産工学研究センター
平成 20 年度生物生産工学研究センターシンポジウム開催のお知らせ
29 環境安全研究センター
第 18 回 環境安全研究センターシンポジウム「循環型社会のデザイナー-資源・リサイクル・廃棄物処理の全体像-」
30 大学院工学系研究科・工学部
東京大学グローバル COE 「セキュアライフ・エレクトロニクス」シンポジウム～ 21 世紀の社会は先端エレクトロニクスでどう変わる～

お知らせ

- 31 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第 515(11 月 5 日)号の発行——教員による、学生のための学内新聞——
31 学生相談ネットワーク本部
三浦雄一郎氏 講演会～ 75 歳、エベレスト登頂への挑戦～
32 情報基盤センター
“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ
33 大学院工学系研究科・工学部
IAESTE 帰国者報告会 開催のお知らせ
33 本部学生支援グループ
「秋の三四郎池再発見ウィーク」が開催されました & SILR (三四郎池のランドスケープ・リノベーション) 最終報告会が開催されます！
34 情報基盤センター
福武ホール実習室開室時間のお知らせ

事務連絡

- 34 人事異動（教員）

淡青評論

- 36 大学の矜持

◆ 表紙写真 ◆

会場内に名誉博士記を披露するレビン学長
(2 ページに関連記事)

編集後記

奇しくも、この学内広報の配布とほぼ同時期に、対外広報誌【淡青 21 号】が各部局に配布されるはず……というわけで、ここで少し PR を。今号の【淡青】は小宮山総長の任期 4 年間に総括する特集となっています。特に総長ロングインタビューは、アクション・プラン誕生の裏話、様々な施策に対する総長の思い、次期総長へのメッセージなど、盛り沢山の内容です。学内広報と併せて、ぜひ、ご一読ください！（し）



七徳堂鬼瓦

大学の矜持

「一 優等生ヲ廃止スルコト」、「一 科目試験ノ結果ニハ数字評点ヲ廃止スルコト」。大正7年に出された帝国大学制度調査委員会の提言である。学生が点取り競争に明け暮れ、挙句、卒業名簿が成績順になっていたり席次による輪切りが卒業後も付きまとい将来を決めたりという、それまでの悪弊を根本的に改める意図が働いており、卒業式廃止（銀時計下賜廃止）の提言とも関連し、また成績を点数ではなく優良可とする制度の元となったものである（寺崎昌男著「東京大学の歴史（講談社学術文庫）」より）。当時の帝国大学教授陣の高い見識がうかがわれる。

翻って、現在の東京大学はどうであろうか。欧米の大学にならい東大のガウンを揃えて卒業式を重んじる傾向にあり、そこでは学部長賞や研究科長賞が成績優秀者に授与される。通過儀礼の重要さはよくわかるが、行き過ぎた個人の格付けを助長することは、過去の失敗と同じ轍を踏むことにならないか。

教員も学生も学術雑誌の格付けに翻弄され、個人も組織も、評価する側もされる側も、評価疲れを経験する時勢である。最近の東京大学のランキング19位という情報を、バンコクに滞在したおり、タイの国立大学の教員すら既に知っていて話題にするという、この状況をどう解釈したらよいのであろうか。格付けほどあてにならないことは、サブプライム問題の狂態を見ても明らかであろう。種々の格付けやランキングが、特に大学院生や若手の研究者に悪弊をもたらすことが無いよう、帝国大学教授の矜持に倣いたいものである。

英語による学部教育論議も、国際化という言葉に振り回されないことが肝要である。小生が関係する専攻は留学生特別コースを有し、英語による大学院講義を行い、また研究室メンバーが一堂に会する研究会では英語を使用している。唯一の共通言語である英語を使う必要があるからである。素朴な疑問として、日本人の教員が日本人の学生に専門科目を教えるのに、何故英語を使う必要があるのだろうか。大学は職業訓練校ではない。坂口安吾風に言えば、必要が全てである。

山本和夫（環境安全研究センター）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1379 2008年11月14日

東京大学広報委員会

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報グループ

TEL：03-3811-3393

e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

http://www.u-tokyo.ac.jp